

基督教の研究

829

144

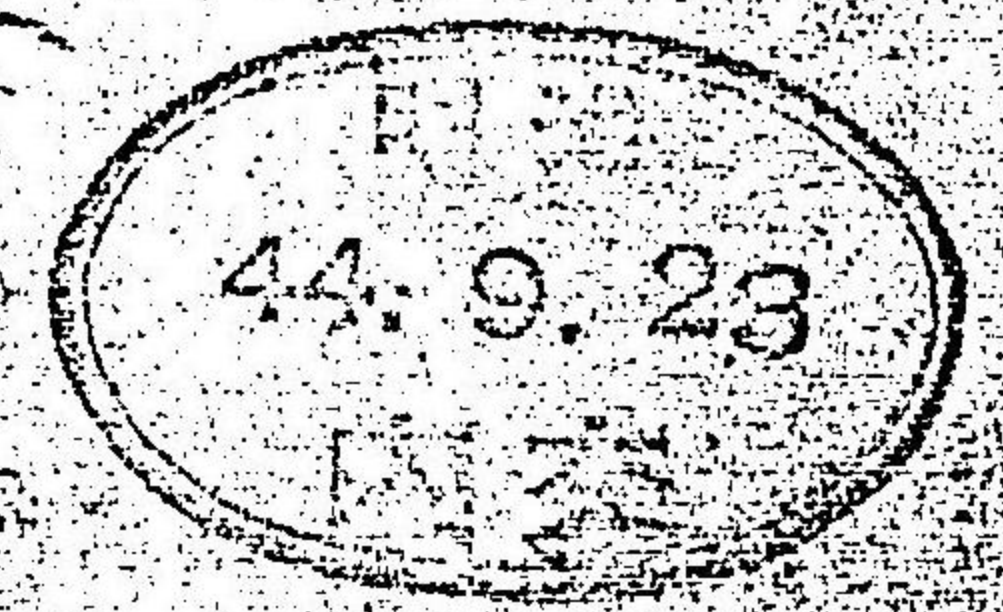
325-142



# 基督教の研究

井口彌壽男著

東京 内外出版協會



序

從來我國にては、宗教とし謂へば、逆巻く生活の怒濤に抗し兼ねたる弱者が、倚りて以て慰安を得るの手段と思はれたるが如し。さればこそ意氣盛んなる男子に取りて「宗教」の語は寧ろ一種の恥辱と響きしなれ。基督教も亦宗教なれば、爾しかく思はるゝも強あつかちに無理ならねど、之これには之の特色あり、そを知りたる上にて、信ずるの恥辱ならば信ぜざるも可、信ずるの正當ならば、一日も早く我有となすの最も可ならずや。兎角は概略に通じ根本を握りたる上のことなり。

二  
本書は基督教の如何なるものなるかを知らんとする諸氏に向つて、斯教に關する如是我觀を述べたるものなり。渺たる一小冊子、其の載する所固よりホンノ梗概に過ぎず。加之著者の淺學にして經驗に乏しき、且つ文に習はざるの結果、論旨の徹底せざるもの、文意の不  
明なるもの、及び前節後項互に錯雜矛盾せるもの多からむを恐る。

本書に強いて特色を求むれば、第一、是れ外人の基督教に  
ならず、負ふ所は勿論多しと雖も、而かも我等が經驗の胃腸を通りて、既に我等の血肉と化したるものな

り。第二、内容法式必ずしも内外先輩學者の跡を踏まず、著者が邦人基督者として獨立の見地より觀たるものあり。第三、著者は元來基督教界が論争の中毒に罹れるを患ふる者なり。所謂正統派はスコラスチズムの衣鉢を受け、一切を擧げて議論の渦中に投ぜんとし、所謂自由派は近世科學の城壁に楯籠り、實驗科學的論法を以て宗教を論ずる者さへ無きに非ず。著者は何れにも與みせざる者、議論を行るに正直を旨とし、不知を不知として之を省き、信ずるを信ずるとして告白に止め、力めて人智の制限を超えざらむとし、亦獨斷を飾るに科

學的衣冠を以てする近代的病弊を避けんとせり。第四、能ふ限り讀者の經驗を重んじたれど、信仰に入るや徹頭徹尾基督中心を主張せり。而して神人關係を父子關係となし、殆ど此の信仰を以て一貫したる結果、天國、救ひ、其の他の教義中、猶太の時代思潮たりし君臣的思想の混入せるを除去したるあり。

基督教を説明せるものにて、是れまで出版せられたるも多かれど、多くは翻譯書のみ、所説の吾等の經驗に觸るゝもの少き、亦已むを得ざるなり。之を知らんと欲する者の日に多きを加ふるに拘らず、其の需要に應ず

るの書甚だ少く、世人動もすれば基督教を以て難近難解のものとなすに至らんとす。著者久しく之を憾みとせしが、其の缺陷の一隅を埋めんとて、茲に此の小冊子を公刊することとなりぬ。讀者の靈性に寸益を與ふるを得ば、之を喜ぶ者豈讀者と著者とのみならんや。

明治四十四年七月一日

信濃川河口の邊にて

井口彌壽男誌

# 目次

緒論	一
一 實際生活と宗教	一
二 宗教の由來	七
三 宗教の三要素	三
第一章 宗教の主體即ち人觀	六
第一節 人の二成分	三
一 肉體	三
二 精神	四
三 肉體と精神との關係	七

四 人と他動物……………一〇

五 人の起原……………一五

第二節 靈性の三面……………二〇

一 智識……………二七

二 道德心……………三三

    (一)自由意思(二)良心

三 宗教心……………三九

    (一)宗教心は人の本性なり(二)宗教心とは何ぞや

第三節 靈魂不滅……………四五

一 靈魂不滅の意義……………五〇

二 靈魂不滅の暗示……………五九

    (一)人生事實の暗示(二)進化論の暗示(三)道德心の暗示

三 靈魂不滅の信仰と實際生活……………一〇〇

    (一)義務心(二)希望と忍耐

第二章 宗教の客體即ち神觀……………一〇六

第一節 自然界に於ける神の顯現……………一一三

一 自然界の啓示……………一二三

    (一)自然界の現象は大智大能大徳の神を現はす(二)原因の觀念に大智大能大徳の神現はる(三)目的の觀念は唯一の大智大能大徳の神を現はす

二 傳説の暗示……………一二九

    (一)創造説は傳説なり(二)傳説の由來(三)傳説の批判

第二節 人生に於ける神の顯現……………一三五

一 人生の啓示……………一三八

    (一)智識(二)道德心(三)宗教心

二 傳説の暗示……………一四  
 (一)神人近似(二)此傳説の批判

第三節 耶蘇基督に於ける神の顯現……………一五

一 イスラエル民族に於ける啓示の發展……………一五〇  
 (一)個人の守護神より一家の守護神(二)國民の守護神(三)正義仁愛の神  
 二 耶蘇に於ける啓示……………一六九  
 (一)史上の耶蘇(二)神は耶蘇の父(三)神は亦我等が父(四)血と肉との證明  
 三 基督者に於ける啓示……………一七七  
 (一)依然として國民の守護神(二)耶蘇の父(三)萬國萬民の父(四)慈愛限りなき父

第三章 主體と客體との關係即ち信仰觀……………一八〇

……………一八〇

第一節 基督教の成立……………一八四

一 人の罪……………一八四  
 (一)罪の由來(二)罪の事實(三)罪の結果  
 二 受肉降世……………一九三  
 (一)舊約の承認(二)受肉降世の可能(三)受肉降世の結果  
 三 聖靈……………一九六  
 (一)信仰の主動者(二)信仰發展の原動力  
 四 三重説……………二〇四  
 (一)是れ實際問題なり(二)三重説と信仰生活(三)之れ超數理的なり(四)三重説と聖書解釋

第二節 信仰生活……………二〇六

一 信仰の動機及び目的……………二〇六  
 (一)「寛ゆる父子關係」(二)信仰の動機(三)信仰の目的



二 信仰生活要義……………二七

(一)アルファにしてオメガ(二)養ふべき真習慣

三 天國……………二九五

(一)出世間的意義(二)現世的意義(三)靈的意義

第三節 教會……………三〇一

一 教會の由來……………三〇二

(一)教會の創立(二)猶太に於ける迫害と其の結果(三)羅馬の迫害と其の結果  
(四)中世紀の墮落と其の結果(五)我國の基督教

二 教會の使命……………三二八

(一)理想の教會(二)野戦隊

三 教會の行事……………三五

(一)日曜日禮拜(二)日曜學校(三)祈禱會(四)傳道說教會(五)クリスマス  
(六)イースター

結 論……………三四〇

一 基督は真人なり……………三四一

二 基督は真神なり……………三四六

三 基督は神人關係の體現なり……………三四〇

目次終

# 基督教の研究

## 緒論

### 一 實際生活と宗教

「<sup>イエス</sup>耶蘇船に乗りければ<sup>弟子等</sup>弟子等も之に従ふ。此の時大なる<sup>颶風</sup>颶風起りて、船を蔽はむばかりなる浪立ちしに耶蘇は寝ねたり。弟子等之に近づきて醒し曰ひけるは、主よ救ひ給へ。我等亡びんとす。耶蘇彼等に曰ひけるは、信仰薄き者よ何ぞ懼るゝや。遂に起きて風と海とを<sup>斥め</sup>斥めければ、大に平<sup>息</sup>息になりぬ。人々<sup>奇み</sup>奇み曰ひけるは、此は如何なる人ぞ。風も海も之に従ひ

弟子等の多數はガリラヤ湖邊の漁夫の子、水に生れて水に育ちし魚類にも等しき者共なれば、雲行を眺めて天氣の變化を豫知するの確なる豫て安全なる航路を辨へ、風浪に乗じて小船を操るの巧妙なる誰か我等に若かんやと、今も能く見る如き勞働者相當の慢心を有ちたるならむ。されば彼等が初め漕ぎ出すに當りてや、空に一片の雲氣なく、險惡なる徵候とては露ばかりも現はれず、風は順水は平穩、あはひ遠からぬ對岸に達するに手間も暇も入るものかはと、無造作に漕ぎ出して沖へ沖へと進みしなり。然るに見よ、彼等が直中に出でし頃、空模様俄に變り、アナヤと叫ぶ遑もなき湖水名物の颶風、砥石の如く滑なりし水面には、忽ちにして怒濤の山嶽、あはれ木の葉船の痛ましき、忽ちにして山頂、忽ちにして谷底浪の弄びに任ずる外、日頃練ひし力腕も物の役には立たぬなり。

櫓舵はあれども用立たず、何とも詮術なき絶體絶命、平和に眠れる耶蘇を醒して其の助けを請はむと心付きぬ。曰く『主よ救ひ給へ、我等亡びんとす』。醒めたる耶蘇は、暴風怒濤を感せざるもの、如く『信仰薄き者よ何ぞ懼るゝや』と誠しめ給ふ。弟子等は意外の語に驚きたるべし。何となれば彼等が懼るゝは外部の爲なり、猛烈なる風怒號する浪、此の強敵に向ふに脆弱なる小船、彼等が氣を奪はれ爲す所を知らざりしは之が爲なり。然るに耶蘇が觀る所は彼等心中の暴風怒濤なりき。彼等は心の平均調和を失へり、彼等の心中は亂軍の状態なり、而して是れ彼等に信仰乏しかりし故に由る。信仰にあらば、外部の事情が如何に變ずるとも、毫も心中の平和を破らるゝことなし。『遂に起きて風と海とを斥めければ大に平息になりぬ』。耶蘇は泰然自若として暴風怒濤に向ひて

斥め給ひぬ。而して風は凧は浪は静まりぬ。心中無限の平和は外部の壓迫に勝たざることなきなり。

四

晴曇風雨變化定まりなきは自然現象の常なるが、人の生涯にも亦此の變化あるを免れず。位置高き人よ、諸君の身に、吹く風の常に順なるを豫想せば、其中既に絶望は孕まれたるなり。富める人よ、今夜諸君の生命果てむ時、其の財は誰の有となるべきか。新婚の夢温き人よ、諸君の幸福は何時までか永續すべき。嫁夫寡婦の世に多きは何を諸君に暗示するかを思へ。健康なる人、若き人、何時までか斯くてあるべきぞ。晴曇風雨變化定まりなきは自然界現象の常なり、而して人の生涯にも之あるを免れざるなり。人生の航路に漕ぎ出せんと、楽しき新家庭を作り、希望多き官途に就き、さては巨萬の富を承継ぐなど、順風を真帆に孕ませる幸運の出途。而かも思ひ掛けなき暴風怒濤に妨げられ、進退度を失ふこと

無しとせんや。此の場合に臨みて、人力の頼むべからざるを知らば、日頃宗教を輕んずる人も、『主よ救ひ給へ、我等亡びんとす』と叫ぶに至るべし。外部の暴風怒濤或は之に勝つを得べし、而かも内部の混亂不和に對しては術の施すべきなきなり。城は高く壕は深くとも、多數の内應者ありて敵の利益を謀るに至らば、防戦の望あるべからず。我等の心中は多數の間諜を混入せる城内の如し。我本心は善を爲さんと望むなるに、反逆の臣ありて表面に忠義を飾ひ、我に勸めて好まざる惡を爲さしむ。而して我は本心の要求に反する行爲を爲して、懊惱煩悶は心中に断えざるなり。平和の基礎茲に紊れて、争で外敵に抗するを得べきぞ。我は戦はざるに既に敗れたるなり。

凡ゆる悲境逆境に勝つべきものは唯心中無限の平和のみ。而して此の平和は耶蘇の賜なり。彼に依れば人の幸不幸は外部の境遇によりて

五

定まるものならず、信仰の有無によりて定まるものなり。何となれば外部の事情は、其の變化多き、恰も秋の夜の如く頼み難ければなり。

「稍、宗教を解する人にして、時に宗教の結果が有形上の幸福となる——或は病氣の平癒、或は悪人が善人に變ずるなどの類——場合に之を賞讃するあり。然れども耶蘇によれば信仰は外に現はれずとも、それ自身に於て貴きなり。如何なる逆境に立つも、信仰ある者は動搖せず、中なる平和は常に外なる混亂を征服して餘りあるなり。逆巻く怒濤の中に悠然として光風霽月を樂しむもの、是れ信仰の力なり。馬太傳第五章に記されたる、耶蘇の山上垂訓中、冒頭に擧げられたる九福は、そも何物なりや。外部の關係次第にて出滅増減する類ひにあらず、悉く是れ心内の所有ならずや。『貧しき』『悲しき』又は『迫害らるる』など、却て外面不幸の觀あるも、信仰を得るの方便となり、又は信仰の結果ならば寧ろ幸福なり。

「實に永劫不朽の財寶は信仰でふ心の中の所有なりけり。變化定まりなきが人生の事實ならば、間諜同居が心内の事實ならば、人には一日も信仰なかるべからず。宗教の本質は空理空論に非ず、日々の實際生活の基礎にして、實際生活より全然引離すべからざるものなり。」

## 一 宗教の由來

さればにや、人類の住む所には必ず一種の宗教あり。昔時希臘の傳記著者として有名なるプリクタクは、萬國を遍歴し、普く民情風俗を觀察したる後、本國に歸りて報告すらく、『所謂所變れば品變るとやら、各國を巡る中には、我に無く彼に有るものを發見するあり、其の代り亦我に有りて彼に無きもの少からず、其の中に一種の宗教のみは、如何なる野蠻國にても之を有せり』と。

八  
ブリッタックの語は今日に於ても猶ほ眞理たるを失はず。文明諸國が宗教を有するのみならず、亞弗利加の蠻人も、ヒマラヤ山腹の山民も、亦一種の宗教を有するなり。我等は横に現代を觀て、縦に古代を想像するの便宜を有す。獸類に近き生活を營める蠻民は、即ち古代人類を目前に現出せるに等しきなり。

されば、今日凡ての階級を通じて一種の宗教をするは、人が人として自己を發見せる時、宗教は既に存在せるを暗示せずや。然り、宗教の歴史は人類の歴史と其の年代を等しうするなり。人類が世に現はれたる時は、宗教は既に存在せしなり。  
人類の歴史は長く一箇所に停留するものに非ず、斷えず動搖し且つ進歩しつゝあるなり。宗教も亦不完全より完全に、粗より精に、下より上に、斷えず進歩しつゝあるなり。時に無宗教の時代と思はるゝあるは、其

の過渡期に當る。舊信仰已に廢りて新信仰未だ現はれず、之を營ふれば有明の月は山の端に隠れたれども、未だ東天紅を告げざるにも似たらん乎。

過渡期は身體の發育にも、國家の歴史にも之あり。避くべからず、必要にはあれど、甚だ危険なる時期なりとす。學生に取りては中學を卒へて高等學校に入らんとするは、即ち過渡期にして、避くべからず、亦必要にはあれど、生涯中危険なる時期の一なり。國の興亡、青年の夭折、多くは此の時期に於てす。

然れども、精神的過渡期の危険に至りては、何物の之に比すべきなし。順に進まば九天に登らんとす。煩悶にはあれど、一步を過たば奈落の底に陥るべければなり。此の時に當りて、頑強なる舊信仰の惰力と戦ひ、新信仰の鼓吹に力め、其の爲に挺身奮闘せる者、之を宗教改革者となす。我

一〇  
國に於ては佛教各宗祖師の如き、多くは此の改革者の部類なり。就中法然の如き、親鸞の如き、また日蓮の如きは、最も傑出せる偉人にて、我國宗教界より彼等を抜かば、更に落莫の嘆きに堪へざるものあり。我輩等が主張したる點に至りては、各特色あり、或は専心念佛の法を立て、或は他力救済の道を講じ、或は法華經一卷を金科玉條となし、所謂御題目を編み出すなど、赤黄青と毛色は變れど、權を恐れず、兵に屈せず、又現世の恥辱を物の數ともなさずして、所信貫徹の爲に勇往邁進せる武者振りに至りては、千歳の下、尙ほ儒夫をして奮起せしむるものありと謂ふべし。政治家、學者、智者に勝りて、彼等が一般民衆の崇敬を受くるの今猶ほ衰へざる所以なしとすべからず。

我國現在の宗教界の状態を観るに、昔に越えたる大過渡期に遭遇せるもの、如し。元より仔細に涉りて觀察すれば、今猶ほ昔ながらの信仰を維持せるもの少からず。既に新信仰を得て靈的新天地を開拓せる者亦皆無とはいふべからずと雖も、大體より觀れば、舊信仰の遺れるは僅に惰力のみ形骸のみにて、而して新信仰の曙光未だ現はれずといふ有様なり。或は曰ふ「我國民は本來宗教に冷淡なり」と。豈夫れ然らんや。試みに田舎の村邑を旅行して見よ、茅屋の點々として見る影も無き邊陲の地に、巍然として雲表に聳えたる建物は、問はでも知るべき、神社ならざれば即ち佛閣なり。是れ我等の祖先に宗教心の篤かりしを語るものなむ。すして何ぞや、現今新教育を受けたる者の比較的宗教心に乏しきは、舊信仰を棄て、未だ之に代るものを得ざるのみ。是れ過渡期に於ける一時的現象と謂ふべきなり。

一  
危険なる過渡期の先陣に立ちて、腐朽せる舊信仰に向つて戦を挑まむ者は誰ぞや。法然、親鸞、日蓮たらむ者は誰ぞや。昔は外國とし言へば支

那、印度に限られたり。宗教改革と言へば、佛教内に限られたり。而かも今や大に趣を異にせり。此の時に當りて若し親鸞、日蓮の世に出づるあらば、彼等が爲さんとする所、必ずしも想像し難からず。新信仰を率先して信じ、之を廣く世に弘めんとするの難事なるは、親鸞、日蓮が傳記の示す所、而かも亦重大なる義務にして、光榮ある業なることも、亦彼等が示す所なり。吾等は寧ろ多事なる過渡期に生れたるを感謝せずむばあらず。

### 三 宗教の三要素

基督教とは何ぞや、名稱の現はせる如く、基督の宗教なり。實にナザレの耶蘇基督こそ、基督教の初中終にはありけれ。此の意味に於て基督教は耶蘇基督の宗教なり。

さらば宗教とは何ぞや、古來之に對して定義を下せる者少からずと

雖も、そを一々列擧するは、煩はしき割合に効大ならず。故に吾等は今主なる學者數名の説を擧げて満足せんとす。

羅馬のセネカ曰く『宗教とは神を知り且つ之を真似ることなり。』獨逸のカント曰く『我等の道德的義務は神が與へたる命令と悟る、是れ宗教なり。』シユライエルクマッヘルは『吾人の規定し能はざる勢力に對する實際的信賴の感情。』を以て宗教となし。又フイヒテは『宗教とは最高者を知ることなり。』と説けり。

我等は斯かる定義を讀み、流石大家の所説なれば、何れにも道理あるらしき覺えて、殆ど取捨判斷に惑はざるを得ざるなり。然れども、何れにも共通して見逃し難き一事あり、即ち宗教とは人と人との關係にあらず。人と人以上の存在、即ち神との關係なることは是れなり。

是に於てか宗教に三要素の缺く可からざるものあるを發見す、第一



は人なり。勿論人無くとも絶對者は存在すべし。絶對の語中、既に其の意を含めばなり。然れども、人無くんば宗教は存在すべからず。人は宗教の主體なればなり。第二は人以上即ち超人なり。我等は之を神と呼ぶの寧ろ便宜なるを覺ゆ。既に述べたるが如く、人間同士の関係は宗教を形成せず。宗教の對象即ち客體として神あるを要するなり。祖先崇拜及び偉人崇拜など、一種の宗教を成せるは争ふべからざる事實なれども、既に宗教となりたる以上、祖先も偉人も、超人即ち神として待遇されたるなり。我等は既に二要素を挙げたり。即ち第一人、第二神と。而かも人と神とが別々に存在せるのみにては宗教とはならぬなり。二者の間に何等かの關係生じ、茲に初めて宗教は成立す。是の故に第三の要素として兩者の關係を挙げざるべからず。即ち何れの宗教を問はず、是等の三要素を備へざるは無し。

茲に一の宗教ありとせよ。人若し其の宗教の價值如何を知らんとせば、三要素を各別に研究するに若かず。即ち第一に其の宗教の人觀、即ち人を如何様に見るやを知らざるべからず。こは一切智識の基礎にして出立點なり。既に宗教の存在を承認するからには、人を單に動物と看做す者はあるまじけれど、中々一樣には行かぬものなり。前に述べたる定義を見るも、フイヒテの如く知識を重んじたるもあれば、カントの如く意志を偏重せるもあり。またシュライエルマッヘルの如く只管情に偏せるもあるなり。同國同時代同宗教の人にして、尙ほ且つ一致せざること此の如きを見れば、諸種の宗教中には随分奇妙な人觀もあるべき譯なり。宗教は人觀の如何によりて神觀及び神人關係に影響を及ぼすこと尠少にあらず。例せば、人が人格者たるを無視し、自他の間、我と宇宙との間に何等の區劃を置かざるときは、神の人格者たるを會得すべからず。

責罰感恩の念亦妄想と化し去らんのみ。即ち汎神教は此の立場より生れたるなり。人の靈性の存在を否定し、總ての精神的活動をば物質なる脳髓に歸し、人を以て單なる動物に過ぎずとなさば、固より神を解すべからず。宗教は彼等に取りては無意義なり。唯物論は即ち是れ亦人が本來道德的宗教的存在たるを承認せざれば、一切の道德、宗教は、唯或目的を遂げん爲の手段方便とならん。

人觀に次いで、吾等は神觀、即ち神は如何なるものかを知らざるべからず。人觀は一切の基礎にて、そが神觀に及ぼす影響の大なるは、疑に述べたる所なるが、之に反して、神觀が人觀に及ぼす影響も、亦決して尠少なりと謂ふべからず。蓋し今日我等が或事物に就いて研究せんとするや、必ず自己を以て出立點となさざるべからずと雖も、初め自己ては意識の發作は、客觀世界の認識に後れたることと言ふを俟たず、例せば哲學

研究に於て、本體論に先づに智識論を以てすれども、智識論の起らざる以前より一種の本體論は存在せるなり。別言すれば、客觀世界先づ我等に現はれ、それに彩色されて主觀世界は生れたるなり。故に我等は人觀を主とし第一とし、神觀を客とし第二としたるは、今日の研究順序にて、實際に就いて言へば、我等は自己を發見せざる遠き以前より、一種の神を拜し居たるなり。而して其の神に彩色せられて、種々に自己を形づくるなり。されば神觀の如何が人觀に影響するの著しきを知るべきなり。扱茲に神觀の主なるものを擧ぐれば、先づ、

(イ)多神教 なるべし。日月星辰山川草木禽獸其の他死せる人物を崇拜するなどの類是れなり。是れ決して我國のみにあらず。何處の民も、未開の時代に在りては此の如き多數の神々を信じ來れるなり。ソクラテスを出し、プラトウ及びアリストテレスの如き大哲人を生みたる希臘

に於てすら、當時に在りては、市民の數に數倍せる神々を信せりと傳へらる。以て其の他の國々を推知すべきか。

多神教は一人格を支離滅裂ならしむ、即ち眼の神あり、頭の神あり、鼻の神あり、且つ此の世の神あり、後の世の神ありて、分領するを以て、一人にして數十百に分離せられざるを得ざるなり。鼻と眼と相關係し、現在と未來と相通じ、我は何處までも一個人格たるを覺らば、多神教は消滅して、唯一神教となるべきなり。多神教の存在するは、自意識が発達せざる間のみ。言はば多神教は各地に大名てふ君主に擬したる者ありて、世を治めたる封建時代に比せらるべきか。人民の自意識發達し、是れまで君主と仰きたるは、總て彼等と等しく臣民の伍伴に列すべき者なるを發見すると同時に、九重の雲深く隠れ在せし上御一人こそ眞の君主なるべきを覺るに至らば、~~多君主主義~~の封建制度は自然に瓦解せざるを得

ず。多神教も亦畢竟此の如きのみ。我國既に維新の大改革に由りて、多年の因習たりける~~多君主主義~~を棄て、上御一人を君主と仰ぐこととなりぬ。是れ豈精神的維新の到來を告ぐる豫徴たらざらんや。

(ロ)汎神教 汎神教は宇宙即ち神教なり。森羅萬象を其の儘神の顯現と認むるものなり。元より人類は自然界中最も上位にあるものなれば、其の儘神たるや言ふを俟たず。之を譬ふれば、共和政治の如きか。否無政府主義に近からんか。多君主主義には多くの矛盾と弊害とが之に伴ふあるを免れず。人の自意識發達するに従ひて、同等なるべき臣民の君主と仰ぐの愚なるを知り、且つ眞の君主に對して大不忠なりしを悔い、斯くて上御一人を君主と仰ぐに至らば、自他の幸福之に勝るもの無しと雖も、一步を過まれば、君民本來平等なり。彼君主たらば我も亦君主たらむと、道理らしき謬論を主張する者あるに至る。多神教より汎神教に移る

べき道筋、亦恐らくは之に類せむか。

宇宙即神、自我即神を主張する汎神教には、大なる真理の含まるゝは言ふを俟たず。宇宙と神と、また自我と神と、密接なる關係の結ばれあるは首肯せらる。然れども惜しい哉。宇宙即神を稱ふる汎神教は、人格性を没却せり。従つて人の人格性をも拒む。こは我等の自意識に反對するものなり。神と人との人格性を没却せる結果が道德上に及ぼす影響如何と見れば、不道德鼓吹とまでは行かねど、善惡無差別、即ち無道德主義となる。無道德主義は、道德心を有するまでに進まざる下等動物か、又善惡の差別界を超越せる達人（實際此の如き人が在るべきや疑はしけれど）の生活にいふことなれば、必ずしも惡事獎勵にはあらず。然れども、我等は實際に於て善惡の差別界の超越せる達人に非ず、また下等動物にも非ず。我等は自己の道德的行爲に對して、到底無責任なる能はず。善であれ

又は惡であれ、我等は自ら行へりと感ず。自己の行爲と他人の行爲とを混同し能はざるなり。略言すれば、我等は責任の個體なり。而して是れ實に人格者の本領なり。此の責任の個體、即ち人格者たる意識こそは道德行爲の基礎なれ。曾て黒岩氏『天人論』を著はして汎神論を説く。中に道德論あり。頻りに人が責任の個體なるを主張せり。而かも汎神教と責任論とは水性と火性との如く、互に相容れざるものなり。氏は自我の擴張を説き、子を愛するは子たる故にあらず。子は我の分身にして、即ち我に外ならず。父母に孝を盡すは父母たるが故に非ず。父母は我の本家にして、即ち我に外ならざればなり。此の如く自我を擴張せよ。總ての人は我なれば之に對する行爲は、我に對する行爲となるなり。と斯様に述べられたり。誠に巧妙なる説明と謂ふ可し。然れども、又思へ。父母、子孫、親戚、朋友、其の他を擴張されたる我とせば、是等に對して孝行、慈愛、親切を行ふ者

も等しく擴張されたる我ならざるべからず。されば好しや父母に對して不孝なるも、其の責任は我に歸せざることゝなる。是れ明かに汎神教と責任の觀念と互に相容れざるを示せるもの。黒岩氏は頭隠して尻隠さざりしにあらざる乎。

汎神教が人の宗教心に及ぼす影響如何と見るに、宇宙即神、自我即神の教義は、偉大ならざるに非ず。人が神性を有すとか、神に似たりとか聽くだに、我等は自己の尊嚴を感じるの常なるに、我等は此の儘神なりと知りて、誰か驚喜せざらむ。然れども退いて再考すれば、人即神の宣告によりて人の價值に何物の加はる無きなり。神と呼ぶるゝも、佛と仰がるるも、人の眞價に何等の變動はあらず。人は依然として元のまゝなり。此の宣告は、毫も人の位置を高むることなく、唯神を高座より下したるのみ。されば汎神教によりて、人は自ら神とならざるのみか、却つて神を失

ひたり。信賴、崇敬、願望など高尚なる宗教心は、其の向ふ所の相手を失ひたるなり。正に是れ嬰兒より母を奪ひて「汝は已に母となれり」と宣告するに等し。嬰兒は母を要す。母に抱かれて、其の乳に飽かんことを望むなり。之に向つて汝は母なりと宣告するとも、嬰兒の饑渴は醫せざるを如何にせんや。汎神教は、人を拉して九天の上に擧げたるが如しと雖も、實は奈落の谷底に抛棄せるなり。

汎神教に學ぶべき長所ありとせば、神の遍在ならむか、神即宇宙、神即人たらずとも、爾く感せられ易き程に、神と宇宙と關係し、神と人と密接せるを示せる點に眞理を含む。汎神教が神即人と斷じたるは、唯一歩を過ぎたる爲にあらざるなきを得んや。

(二)超越神教 超越神教は、汎神教と正反對の極端に走れるものなり。之を南極とすれば、彼は北極ならむか。而して南極と北極とは相反せる

極端なれども、多くの點に於て相似、特に人類の棲息に不適當なる點に於て相等しきが如く、是と彼とは宗教心を満足せしめ難き點に於て相同じ。何故なれば超越神教は神を宇宙と引離し、宇宙の外にありて宇宙を支配するとなせばなり。支配するといへど、直接聖旨の儘に統御するに非ず。創造の初に當りて巧妙なる法則を與へ置き、其の法則を以て支配するとなす。されば我等と神とは直接の關係無く、我等は自然法神が與へたるもの(と關係あるのみ。斯くては微なる崇敬心は維持さるべきも信賴、願望、奉仕などの宗教心は満足せられざるべし。こは無宗教狀態に到るべき道程なり。英國の超越神教が佛國に渡りて唯物論と變じたる、當に行くべき地點に達せるのみ。汎神教は餘りに接近せし爲に茫漠として捕捉し難きに至り、超越神教は餘りに懸隔せる爲に、神の姿を見失ひたり。之を譬ふれば、幻燈に於ける燈火と晝板間の距離の如きが。

宗教の客體たる神が如何なるものかを知らば、第三に兩者の關係、即ち信仰とは如何と尋ぬべきなり。一概に信仰と言へど、其の動機、其の目的、また其の精神狀態に至りては、千差萬別とも謂はるべし。而して是れ皆神觀と關聯す。多神教の信仰の動機は利用方便なるか、然らざれば恐怖心なり。菅原道真を天滿宮と仰ぎ、平將門を神田明神と祀りたるは、祟を恐るゝ恐怖心に因る。京都伏見の稻荷大明神を信心するもの、大阪商人に多く、爲に一日の賽錢平均三千圓を下らずと云ふは、功德を願ふ利用方便心に基く。而して疫病除や災難祓の如きは、恐怖心と利用心の結合せるものなり。其の精神狀態は、商人の取引に等しく、其の目的は利己的なり。而して其の神人の關係は、本來斷ち難きものあるに非ず。甲神を去り乙神に就くも可。同時に數神を拜するも亦可。共に數神を棄つるも亦可なり。要は己が欲するが儘のみ。其の狀恰も日傭人と主人との關

係の如し。我も一時の便宜上彼に従ひ、彼も亦暫く我を保護するに過ぎざるなり。此の如きは決して高尚なる宗教とは謂ひ難し、而かも多神教は到底此の外に出でざるべきか。

汎神教の神人關係は如何といふに、宇宙即神、又は自我即神を主張する汎神教には、神人關係のあるべき理なし。人は其の儘神たればなり。汎神教に在りては我以外何物もあるなし、神以外何物もあるなし、而して總ては神、總ては我なり。斯かれば神人關係は生じ來らじ。若し強いて類似の點を求むれば、大悟なり、自覺なり、祈禱の代りに默想なり、愛の懷に抱かるゝ代りに無意識世界に逍遙することなり。

超越神教の神人關係如何と見るに、前にも既に述べたるが如く、神は餘り遠く隔たりたれば、何等の關係も起る能はず。人と密接なる關係を有するは唯法のみ、唯理のみ、宗教としては眞に憫むべきものなり。

以上述べたるが如く、總ての宗教に必ず三要素を含まざるは無し。故に人若し或宗教の價值を判知せんとせば、各要素に就いて高低、強弱、豊貧の度を究むるに若かず。基督教亦宗教なれば、三要素を具備す。吾等は基督教の何なるかを知らんと望む人の爲に、逐次之を説かんとするなり。

## 第一章 宗教の主體即ち人觀

希臘の神話にあるスフィンクスの謎の話を知らざる人は恐らく少かるべし。スフィンクスは半人半獸の怪物なるが、彼途行く人に謎を掛けて曰ふ、世に怪物あり、其の脚時に従ひて増減す。即ち朝に四脚、晝間に二脚、而して晩景に至れば三本脚と變る。此の怪物は何物なりや。解き能はざる者は悉く之を捕へて我が食膳に供せむと。脚數不定の怪物は、言ふまでもなく人なり。脚數の増減は發達の有様を現はせるもの。即ち朝といふは嬰兒時代にて、四本脚なり。唯一人の除外例も無く、吾等は總て四本脚時代を經過せるなり。晝間といふは壯なる時代。此の間人は何等の助けを要せずして、二本脚をもて自由に歩行す。蓋しスフィンクスは二十世紀の少壯男兒が、ステツキを携へてハイカルをば豫知せざり

しなり。而かもハイカルとハイカラざるとに關せず、二本脚は遂に三本脚杖を加へてと變らざるを得ず。晩景、即ち老衰期は早晚必ず來るべきなり。

人なりと答へなば、スフィンクスの食餌たるの危難を或は免れなむ。然れども、今一步進みて『人とは何ぞや』の問題に移らば、何と答ふべきか。希臘の大哲ソクラテス以來二千四百年間、此の大疑問に對して完全に答辯し得たる者としては未だ曾て之あらざるなり。ソクラテスが『先づ自己を知れ』と叫びたるは千古の格言たるを失はずと雖も、彼自ら幾程か自己を知りし。先づ自己を知るは單に道德修養の首途たるのみならず、一切智識に進むべき第一歩なり。今吾等は茲に宗教の主體として『人』を擧げたれども、實は一切智識の主體たり。又基礎たるなり。即ち總ては人が知り、人が信じ、人が行ふ、といふに外ならず。人を離れて何物の存在



するや人たる吾等には解せられざるなり。實に人は一切智識のアルフ  
 ヲにしてオメガ、初めにして又終りなりと謂はざるべからず。

茲に甲乙二人あり、互に親友の間柄なれども、哲學上の意見を異にし、  
 甲は極端の唯物論者にして、乙は正反對の唯心論者なり。彼等出遇ふ毎  
 に議論百出、互に相譲らず。甲の曰く、心靈など無形なるものは存在すと  
 いふも唯言語のみ、名稱のみならずや。實驗も出來ず、證據も擧がらざる  
 ものを信じ、強いて眼前に見る所を否認するは、誠に狂悖の沙汰とや言  
 はむと。乙の曰く、君の議論は淺薄なる俗論たるを免れず。君は靈的實驗  
 をなさずといへど、君が見、聽き、又知るは、抑、何の力ぞや。是れ靈能の働き  
 ならずや。君己に靈に由りて君の周圍を知れり。一切は心靈の顯現たる  
 が故に、心靈を以てする外に辯別するの途なきなり。されば、君が以て實  
 體とする物質は空虛にして、空虛となす所の心靈のみが不變の實體な

りと知らずやと。

吾等は甲乙二人に向つて仲裁を試みんとす。請ふ兩君暫く爭論を止  
 めよ。我等より見れば、諸君の議論は本體論にあらずして智識論なり。宇  
 宙論にあらずして人間論なり。請ふ暫く議論を止めて自己に歸れ。而し  
 て兩君の心的實驗に於て相一致する點を見出すに及びて再び議論を  
 開始せよ。再び相反するに至らば、又元に歸り相一致する點を發見して  
 然る後、三たび議論を始めよ。再四再五此の如くせば、得る所極めて多か  
 らむ。自己を知るの相等しく、經驗の一致するものなくむば、言語の意義  
 すら通せぬものなり。議論するとも何の甲斐あらむや。されば「人とは何  
 ぞや。」先づ自己を知れ。』は一切智識世界に入るべき門口なり。此の門よ  
 り入らずして垣を越えて侵入するは、智識界の盜賊たるを免れじ。

從來基督教を説明せるもの、殆ど總て「神」の問題を以て始めたり。然

れども、斯くては是れまで神を信せりし我等に取りては、空論の感ありて精神に觸れざる憾なからず。故に吾等は先づ「人」の問題に始め、讀者と共に考へ、共に經驗し、漸次遠く、高く進まむと欲す。されば何等の對象關係に由ることなくて、單に人を知らんとするは不可能なり。少くとも可能の範圍甚だ狭小なるを免れず。されば、本章に於て説く所、淺薄の譏を免れざらむも、其の不足は第二章第三章に至りて、或は補ふを得む乎。

### 第一節 人の二成分

唯物論者は曰ふ、世に精神など無形なるものが存在するものかは、精神と思はるゝは、實は物質的機關(腦髓や神経系統の如き)の作用に外ならず。人の活動を見て靈魂ありと断定するは、巧妙に運轉する機械を見て精神ありとなすに等しく、誠に狂妄の至りなりと。之に反して、唯心論者は曰ふ、森羅萬象總て心靈の發動顯現のみ。眞に存在するは心靈にして、有

形物は假象に過ぎずと。

そは兎まれ、我等普通人の常識にては、人には肉體と精神との兩面あるが如し。實在なりや或は單に爾思はるゝ假象なりやを知らずといへども、人は自己を意識し、他人を量る時、自然に此の兩面を認むるなり。こゝは研究の結果にあらず、日常吾等の經驗に依る、實在なりや、將た假象なりや、を定めんとすればこそ、唯物論者や唯心論者も生するなれ。常識の經驗範圍に於ては、此の二面を否定せむ者唯一人も無かるべきか。我等は先づ常識の經驗を以て始めんとするなり。

#### 一 肉體

常識の經驗に依れば、人の一面は肉體なり。肉體は物質界の一部にして、其の質は人の住所たる遊星(即ち地球)と遶ぶ所なし。化學は之を分析して各原素に還らしむ。化學上より觀れば、人は數十原素の化合物に遶

きざるなり。而して物理学は善く其の運動の法則を示す。人の運動は如何に巧妙を極むるとも、物理学上の原則を出づべからず。甚だ不完全ながらも、生理学は人の誕生、生活及び死去の法則を説明す。

成分の上より觀れば、人は一般動物と何等の等差なく、構造、運動、生活の狀態に於て、多少程度の差はあれども、人は畢竟動物の部類なり。人は動物の如く生れ、動物の如く生活し、而して動物の如く死するなり。されば、精神的に定義せむよりは、寧ろ動物的に定義するは容易なり。容易は則ち容易なるべきが、我等は如何に精確なる定義を得るとも、單に動物としては満足する能はざるを如何にせむや。

## 二 精神

我等の經驗に依れば、人には肉體の外に精神でふもの存在す。或は精神と名け、或は靈魂と呼ぶも、其の如何なるものなるかは明確に知る能

はず。人若し化學的分析の方法に依りて精神を捕へむとせば、必ず失望すべし。而かも精神存在の證據は、必ずしも物質存在の證據と比して、精確の度に大差ありと謂ふべからず。精確の度に於ては異なるなきも、實驗の性質一様ならざる爲に、爾く誤らるゝこと少からざるなり。

精神は之を手に捕へ、眼に見、器械に掛けて實驗する能はずと雖も、自ら感得するものなり。我等が經驗に依れば、我を我と意識するは靈の力なり。他人を他人と認むるも、亦靈の力なり。管に靈を辨ふるのみならず、尙ほ肉體を識るも亦靈の力なり。所謂科學的研究法たる、總合や、比較や、分析や、縦ひ器械を使用して之を爲すとも、首腦者は精神にして、器械は寧ろ從位に屬す。されば、肉體の存在よりも精神の存在は却つて根本的にあらずや。或は之を信じ、或は之を疑ふ。是等は等しく靈能の存在を示すものならずや。靈の存在と其の力とを承認せでは、肉體の存在と其の

働きすらも信じ能はざるに至るべし。若し夫れ我等が自己に對する意識(我を我と知ることなり)他に對する推知、信じ、或は疑ひ、肯定し、或は否定するをば、舉げて器械的作用に過ぎずとなす者に對しては、吾等復た何をか言はむ。

外界に森羅萬象の變化窮まり無きあるが如く、内界にも亦之あるにや、精神の働き千狀萬態殆ど盡くる所を知らざるものあり。而かも心理學者は其の作用に従ひて之を三様に分ちて研究するを常とす、實は必ずしも三作用と限られざるべけれども、便宜の爲に小異を捨て、大同を取り、斯くて三分するに至れるなり。言ふまでも無く三作用とは智情、意是れなり。

人は考へ、知り、記憶し、想像し、且つ推理す。是れ即ち智力、人は苦痛、快樂、喜悅、憤怒、悲哀を経験し、愛着、憎惡の念を有す。是れ即ち情の力、人は心中

に侵入せんとする事物を判別取捨して、自己の行爲を定め、諸種の妨害と誘惑との中に立ち、決然として所志を斷行す。是れ即ち意思の力なり。此の外、特に正邪善惡に關する行爲に對し、或は識別し、或は快苦の情を示すものを良心となし、之を第四に配列する學者あれども、我等の經驗に依れば、良心は智情意を通じて働く所の靈力にして、第四に列せしめらるべきものにあらず。

以上舉げたる三作用は、三心を表はすにあらず。凡ての作用は唯一の自我てふ意識中に統一さる。人格者たる所以は此處にあるなり。

### 三 肉體と精神との關係

肉體との關係は如何、非肉を靈とし、非靈を肉とするほどに相反對し區別さるべきかといふに、我等の經驗に依れば然らず。他日は知らず、少

くとも今日の處にては、靈肉兩面は互に密接して相離すべからざるが如し。近世心理學を研究せむとする者、先づ生理學に依りて腦髓の構造及び作用、神經系統の組織及び其の作用を究め、然る後、精神方面の研究に取掛るを常とするは、二者關係の如何に周密なるやを示せるもの、他ならず。

前にも述べたるが如く、世には精神の存在を信せざる者あり、彼等が言ふ所に據れば、精神と誤信せらるゝものは、悉く腦髓の作用にて、恰もオルガンの音がオルガンの外に存在せざるが如く、腦髓の外に精神なるものゝ存在するにあらざるなりと、また肉體の存在を否認する人あり、其の言ふ所に據れば、我等が一切智識の根柢たる自意識の中には、腦髓及び神經系統、其の他何等肉體なるものある無く、在るものは唯精神のみ、されば精神こそ人の主體にして、又根柢にはありけれと。

是等相反せる極端論者あるは、畢竟するに靈肉の關係が餘りに周密にして相離すべからざる爲なり、我等は前に我を我として意識し、他を他として推知するを靈の力となせり、總ての事物を辨別するは、固より靈の力に相違なきも、今日の處にては、我等は肉體の力を借るにあらざれば、靈を辨ふることだにも叶はぬなり、管に肉體によりて、腦髓や神經の助けを得て、思考するのみならず、肉體的に想像するの外、吾等は靈を辨へざるなり、靈的問題に關する吾等の智識が、動もすれば物質的傾向を帯ぶるもの、亦餘儀なき次第と謂ふべきか。

靈肉二者の不可分的關係は、日常我等が經驗する所によるも明かなり、即ち心中に憂悶するあれば、必ず肉體に影響す、或は喜悅、或は憤怒、何ものか肉體に現はれざる、精神先づ衰へて肉體病むこと珍らしとせず、之に反し、精神に生氣起り、元氣旺盛なるに至れば、瀕死の重患立るに瘥

ゆることあり。精神療法の効果奏するは之が爲なり。吾等は醫藥の効用と世に認められたるもの、中其の大部分を精神的効用に歸するの事、至當なるを覺ゆ。近頃或有名なる學者が、精神療法は、神経系統に關する病に効用ありと言へりとも、くしく記されたる新聞を讀みて、吾等は思へり、身體の那邊が精神と關係せざるや。遠近強弱の差は之あらむ、而かも身體各部の總ては精神と關係す。精神療法にして効果ありとせば、一切の病に對して、縦しや相等しくと曰はれずとも相近き効果あるべしと。肉體が精神に及ぼす影響亦尠ならず、身體健康なれば精神亦自然に爽快なり。身體に故障を覺ゆれば、從つて精神亦衰ふるが常なり。是等日常の經驗は、精神と肉體と不可分的關係あるを語るものにあらずや。

今日の處にては、殆ど一の精神作用も肉體と關聯することなくしては

起らず。即ち肉體中の斥候ともいはるべき感覺器(觸味嗅聽視の諸官)先づ外部の異變を腦に傳ふ。傳達の役目は神經の司る所なるが、其の精確なる、又其の迅速なる、電信電話の能く及ぶ所に非ず。腦髓に到りて精神は之を受け、知覺し、理解し、且つ評價す。精神が一の作用を外部に表はさんとするに當りては、全く之と反對の順序にて、腦髓より神經を経て肉體諸機關に命令するなり。之を官廳に譬ふれば、外部に直接の關係を有する諸機關(耳目口鼻皮膚手足の如き)は、受信發信を司る受附掛の如く、神經は取次役たる給仕の如く、腦髓は實務の首腦たる事務官の如く、而して精神は統轄指揮者たる長官の如きか。長官は直接實務を執らざるを以て、或人の眼には不在勝ちとも見えぬべし。而かも事務官以下一人の怠慢者なく、申合することなくして自然に一致し、各自其の本分を盡しつゝあるは不思議なる長官在るによる。實に精神は不思議なる長官

かな。

肉體は精神作用の先をなし又後をなす。斯くばかり精神の作用に不可欠ほどに重要な役目を有する肉體は、精神の上位にありやといふに、我等の經驗に依れば、然らず。精神は全體に首位を占め、肉體は總て從位に屬す。若し多く働くに不可缺要具たるとの爲に首位を占め得べくむば、官廳の給仕は長官の位置に座すべきもの乎。豈夫れ然らむや。精神は主にして根本たり。肉體は從にして結果たり。而して其の關係や靈肉の性質上自然また當然のことにて、決して一時的のものに非ず。肉が肉である限り、靈が靈である限り、當に此の如くあるべきなり。彼は肉慾に負けて墮落せりといへば、恰も肉體が精神を壓伏せるかに聽こゆれども、決して然ることあらず。行爲の首腦が精神たるは、如何なる場合にも變らざるなり。

吾等は精神、肉體と二種の名稱を用ゐたれども、精神我と肉體我と二箇の我あるにあらず。我は何處までも唯一人格たり。肉體てふ家に住み、衣服を纏ひたりとも、二我三我とはならざるなり。徹頭徹尾、我は唯一人格にて、一切行爲に對して責任の主體たるを忘れざるなり。

#### 四 人と他動物

世に頭と胴と混同する者はあるまじ。明かに頭は胴にあらず、亦胴は頭にあらざるなり。二者の間には三歳の兒童といへども善く之を識別するほどの區劃あるが如し。然れども、一寸一分の過不及なく、兩斷して頭と胴とを分たんとすれば、振り上げたる太刀も容易くは下し能はざるべし。人と他動物との差別も亦恐らく斯くの如きか。明確なる境界線あるが如くして、而かも亦類似の點少からず。

人と他動物と最も近似せるは、身體諸機關なるべし。單り其の材料が

性質を同じうするのみならず、構造の如きも、高等猿類の身體諸機關と人類のそれとは、明かに別ち難きほどに近似せりと、進化學者が説明する所、蓋し眞なるべき乎。彼は伯父の從兄弟、是は從兄弟の從兄弟の從兄弟と辿り行けば、是れまで全く他人と思ひし人も、實は他人ならず、一箇村擧げて親類縁者たる如き觀あるは、田舎の村々に珍しからざる習ひなるが、進化學者に従ひて人類の系圖を遠く溯りて探索すれば、蚯蚓あづまぢも、蠱斯あぶらも我等の他人にはあらず。遠近の差等こそあれ、總ては親類縁者たるを發見するなり。是に於て乎、吾等は肉體組織の方面より觀て、人と他動物とを明かに區劃するの容易ならざるを覺ゆるなり。

然れども、眼を轉じて精神方面を觀れば、人と他動物との間には見逃し難き差別あり。即ち

第一、人は「我」てふ自意識を有す。また内心に對して反省力を有す。是

等の能力は發達するに従ひて現はるゝものなれば、野蠻人や幼兒には在るとしても萌芽のみ推して以て他動物に此の能力なきを知る可きか。

第二、他動物は殆ど同一地點に佇立すれども、人類は斷えず進歩發展す。人類の歴史は進歩史なり、又發展史なり。一個の人が世に出でんとするや、先づ母胎内にて最下等動物の體形を取る。漸次發達して人の形に近づき、呱呱の聲を揚ぐるも、尙ほ彼は嬰兒たるに過ぎず。意思の發表なければ、精神なるものの幾程まで發達せるや疑はし。彼は自ら一步も進み能はず、食ひまた飲むことも得せぬなり。誠に是れ蠢爾たる一動物に外ならず。然れども、彼は何時いつまでも嬰兒の位置に佇立せず、言語を學び、動作を習ひ、意思の發表と所志の實行とに多く不自由なき少年時代に進み、益々進みて青年となり、壯年となる。實に進歩は人の特徴なり。



一個人の成長史は、全人類の發達を暗示するものなり。進化學者の言ふが如く、人類は其の初に當りて野獸の如く飲食し、野獸の如く棲息し、又野獸の如く嬉戲せしならむ。然れども、野獸は永久に野獸たれど、人類は同一地點に佇立せずして斷えず進歩す。彼等の住居は露天の轉まび寢かに始まりて、穴居となり、小屋掛けに進み、而して遂に宏壯華麗なる邸宅と變りぬ。我等は小鳥の巢を見て其の巧妙なる構造に驚くと雖も、富豪の邸宅を眺めて平氣なるの常なるが、猛獸風雨を防がん必要より起りたる人類てふ野獸の住居が、斯くまでに進歩せしかと思へば、驚かざるを得ざるにあらずや。

再び言ふ、進歩は人類の常なりと、野獸は數千年を経るも同様に嬉戲するのみなれど、單り人類の嬉戲は發達して藝術となれり。相撲に於て柔劍道に於て、目にも留まらぬ早業を見る毎に、我等は人類の祖先が、山

野に戯れたりし昔時を偲おもびて轉た懷舊の念に堪へざるものあり。三たび曰ふ、進歩は人類の特徴なりと、進歩なくむば人類は生せざりしなり。

第三、他動物も一種の智識を有するが如し。されど、人類のそれと比較せらるべきにあらず。其の證據には、他動物は智識表白の要具たる言語を有せざるなり。或は言語類似のものを有するやに思はるれど、極めて單純なる間投詞に過ぎず。吾等とても犬の吠聲を聽きて三四種の要求を辨別すれども、其の吠聲や日本犬と西洋犬との區別なきなり。是を以て見るも、彼等のは智識表白の要具たる言語と類を異にするを知るべし。恐らく人のみが心中の要求を外部に表はさん爲に言語てふ一定の形式を用ふ、言語は發達して國語となり、人は之を學び之を研究し、自由にして、比較的深遠なる意義をも表白し得るに至る。進んでは一の國語を他の國語に譯し、一人にして能く數箇國語を習得す。

言語は視覚に訴ふべき一定の符牒に現はされて、茲に文字生ず。文字は組み立てられて文章となり、如何なる言語も耳もて解せらるべきほどのものは、亦眼を以て解せらるゝに至る。斯くて古今相隔つる數千年東西相分るゝ數千里なるも、能く彼此交通するを得るなり。ホウヤアやダンデやセキスピアの詩文も、畢竟するに、人類の言語に外ならず。昔時の親類たりし犬族猿類も、今は早交際するにも術なきほどに懸隔せりといふべき乎。

第四、吾等は人の道德性宗教心に關しては、項を更めて説く所あらんとするが故に、茲に詳述せざれども、我等が日常の経験に依れば、人は高き希望、高き理想に向つて断えず進みつつあり。此の希望や理想やが遙か彼方より綱をもて人を引き寄せつゝあるかと思はるゝ程に、人は上へ上へ、前に前に進みつゝあるなり。元より他動物にも道德行爲に

に類似せるもの皆無にはあらず。鳥や鳩の古事は取るに足らずとするども、我等が日常目撃する所に依れば、飼犬は主人に對して忠義心様のものを有するに似たり。自己の過失を耻ぢ恐るゝ傾向あるも明かに認めらる。また蟻蜂の如き、狼の如き、群を成して生活するものは、一種の社會組織を有するが故に、相互間に道德類似の制裁が行はれつつあるは疑ひなき所なり。然れども、詮する所、他動物は後方より追はれて、餘儀なくさるゝに過ぎず。まさか前方に高き理想ありて、彼等を引くにはあらざるべし。之を譬ふれば、人は馬の如く、他動物は夫れ牛の如きか、馬は引かれて走り、牛は逐はれて歩むなり。

吾等は人と他動物間に於ける共通類似の點及び差別の點を略述せり。固より詳密を盡さずと雖も、一端を捕へ得しかの感なきにあらず。爾

して二者共通類似の點は、人が野生の儘、自然の兒として在る限り、一層強し。吾等は前に自我の意識、反省力、藝術、言語、文章及び最高理想を人類が有するかの様に述べたれども、それは教育されたる文明人のこと、野生の儘なる蠻人には然る能力のありや否を疑はるゝほどなり。然り、野蠻人ほど野獸に近し、而かも彼等が文明の域に進むに従ひて、差別の點愈々顯著となり行くなり。進歩は人の特徴なり、而して亦進歩は人に取りて當然なり、常道なり。吾等は益々進むで他動物との距離を一層遠くせざるべからず。否、全然別物とならざるべからず。

### 五 人の起原

不可思議なる此の人類は、何處より來れるぞや。天より降りしか、抑、亦地より湧き出でしか。

古來の傳説は天より降りりといふ點に於て殆ど一致せり。猶太の創

造説のみならず、我國の傳説に依るも、我等の祖先は、普通人にあらず、神若しくは半神なりき。是の故に祖先としいへば、無下に尊く、之を追懐するだに畏敬の感に打たるゝ心地せり。是に於てか祖先崇拜は、一種宗教の體形を取るに至る。

然るに、人類天來説に反對して地湧説を主張する勁敵こそ現はれた。近世科學即ち是れなり。前にも既に述べたるが如く、進化論者の説に従へば、人と他動物との間には明確なる境界線の劃するものあるにあらず。總ては親戚縁者なり。否、下等動物は寧ろ我等の祖先なり。少くとも彼等は我等の祖先と同形なり。人若し祖先を懐かしく思はば、去りて猿を見よ、犬を見よ、蚯蚓を見よ、海月くらげを見よ、而して祖先の面影を偲べ、と進化論は告ぐるなり。學者が示す如く、我等各母の胎内に宿りてより、先づ原始動物の形を以て始め、漸次進んで高等動物に變じ、遂に人となりて

生れたりとせば我等は今日の處にては進化論を承認せざるべからず。然れども祖先崇拜宗の本尊が赤裸々にせられ、金箔を剝がれ、加之ならず蛆蟲ムシと同視さるゝに至りては堪ふ可からざるなり。

さばれ我等は崇拜の本尊が赤裸々にされたりとて失望するに及ばず。諸君が若しも只管衣服を拜せしならば、本尊の難有味は減すべきも、然らずとならば、本尊の尊さは神々しき衣裳の有無と關せざるなり。諸君が崇拜する本尊の金箔が剝がれたりとて、諸君は強く憤慨するにも當らず。若しも諸君が只管金箔を敬せしならば、失望するも無理ならねど、然らずとならば、本尊の尊さは毫も金箔の有無に關せざるなり。誰か自己の肉體を尊重せざる者ぞ、身體の尊嚴は之を組織せる物質が下等動物と共通せりとして、其の爲に累を受けじ。足下に踏まるゝ土石と同質より成るとも、我に取りて我身體は貴きものならずや。同様に、我祖先は

如何に憫れなるものとも、子孫たる我等に取りては、祖先たる故を以て貴しと謂はざるべからず。

我等は進化論を信ずるために、祖先に對する畏敬の念に異變を生せざるなり。況んや進化論が言ふ如く、人類は下等動物より進化せりとなすも、神より出でたりとの信仰に反對するものにあらざるをや。何となれば進化論は科學なり、現象の變化を説明するものなり。如何様にして來りしか、其の經過を示すものなり。吾等は進化論に依り、神が如何様にして人を創つくりしかを學ばんとす。是れ吾等が曾て進化論に接せざりし頃信じたる『神が土をもて人を作れり』との傳説を説明せむが爲なり。而して土は一旦最下等動物となり、漸次年代を経るに従ひ、發達して高等の域に進み、遂に人類となりたるを學びたり。こは神が作れりの信仰に反對せず、却かへつて土をもてを説明して神意の確實なるを證するものな

り。是に於てか吾等は何等の矛盾なくして「人は神に創られたり。」「人は下等動物より發達せるなり。」の二者共に眞理と信するなり。即ち後者は作用を説明せる科學上の眞理、前者は根柢を定めたる宗教上の眞理として之を承認するなり。

或は曰ふ、神が作りといふは靈魂にて、下等動物より發達せりとなすは肉體の方面なりと。或は然らん、靈は上より降り、肉は下より昇り、二者結合して人は世に生れたるやも知れず。然れども、靈にも既に述べたるが如く、肉體と精神とは、論者の説く程に別個のものならず。少くとも現在の經驗にては、同一不二と誤らるるほどなり。二か將た一か、明確ならぬ程なり。吾等は非肉と名けて、全く肉體と反對するかの様に靈魂を考へんよりは、寧ろ超肉と稱して、肉體の上に又奥に靈を見出すの至當なるを覺ゆるなり。

故に吾等は靈魂の前在(所謂前世)を信じ能はざるは元より、肉體と離れて格別に神より與へられたりと信する能はず。我等が經驗する所に依れば、我等の身體が幼稚なりし折は、我等の靈も亦幼稚なりき。身體の發達に伴ひて、靈も亦發達せり。肉と共に發達せる靈は、肉と共に始まりしにあらずや。我等の身體が祖先の血統を受け、父母よりの遺傳を引きたる如く、我等の精神も亦其の遺傳を引き、血統を受けたるにあらずとせんや。我等は、肉體としても、將た精神としても、等しく父母より出で、祖先より承継きたるを疑ひ能はざるなり。而してこは決して神より出でたりとの信仰に反するものに非ず。吾等は父母より出でたりと信すると共に、神に作られたりと信する者なり。之を或は間接創造説と稱ふる人もあらんかなれども、吾等は間接直接に分ちて考ふるの妥當ならざるを思ふが故に、慎しみて其の名稱を避けんと欲するなり。所謂直接

にも亦間接にも非ず、科學的常識的經驗に従へば、人は下より出でたるもの、信仰的經驗と宗教的傳説に従へば、人は上より降れるなり、而して前説後説共に經驗範圍の異なるのみにて、互に相反せず、吾等より觀れば二説共に一致せるが如し。

## 第二節 靈性の三面

人の肉體は、其の住所たる地球と同質より成り、下等動物と共通性を有す、とは曩にも言へる所なるが、此の方面より觀れば、人は地球の一微分子たるに過ぎず、之を以て宏大無邊なる宇宙に比するも、大海の一滴に若かざるなり、然れども、肉體の奥底に肉體以上のものあり、其の活躍する様を觀れば、人は必ずしも弱小憫むべきものに非ず、少くとも萬物の首腦、宇宙の冠冕たり、吾等は茲に靈性活躍の三面を觀て、靈性の如何

なるものかを學び、大に自尊自重の精神を鼓吹せんとするなり、三面とは智識的、道德的、并に信仰的をいふ。

### 一 智識

世人口を開けば、森羅萬象の窮まりなきを説き、宇宙の無限無窮なるを述べ、而して其の一微分子に過ぎざる人類の、如何に弱小憫むべきものなるかを主張す、然れども、少時言ふを止めよ、宇宙如何に宏大無邊なりとも、是れ人智の解釋にあらずや、嚴密に言へば智識其のものなり、空に煌く星辰の運行より、肉眼に觸れぬ程なる細菌の蠢動生死に至るまで、一絲亂れざる法則の整然たるを發見して、其の巧妙なるに驚歎するは、吾等の常なるが、翻つて之を發見せる人智の驚歎すべきに心つかざるなり、正に是れ美人鏡に向ひて坐し、鏡面に映りたる美貌に恍惚として心を奪はれながら、之を自己の姿と覺らざるにも似たるかな。

宇宙の宏大なるに驚くよりも、先づ人智の宏大なるに驚け、自然法の整然たるを信するに先ちて、自己の理性の信任すべきを覺れ、自己を信するは靈性活躍の首途なり、發端なり、又基礎たるなり。若し自己の合理性を信じ能はずむば、吾等は一步も外に踏み出すこと能はざるなり。思ふても見よかし、凡ては、如是我知にあらずや、空間の無限なる、時間の無窮なる、法則の整然たる、悉く是れ、如是我知なり。事其の事に非ず、物其の物に非ず、皆是れ、我知なり。故に吾等は人智の合理的なるを承認せざるべからず。こは誠に餘儀なき次第なり。或は注意不足の爲に、或は一般認想の捕虜となりたる爲に、往々人智の眼くらみて、誤謬の判断を下せしことなきにあらず。太陽が東海に現はれて西山に没すと信せられたるも、随分久しきものなりき。太陽中心地動説を唱へたる學者を、異端今日の所謂危険思想か」と見做して、火刑に處したることさへありき。人智は

時に盲し又聾す、然れども、我等は一度病みたるが爲に、我が耳目を疏んずべからず。以後とても必ず過失なしとはいひ難けれど、大體に於て人智の合理性を信じ、之を尊重せざるべからず。然らざれば、靈性活動舞臺に於て吾等は一步も進み能はざるなり。

智識方面より人類の歴史を觀れば、全く是れ智識發展史なり。之を近世の戦争に見ずや、戦争の發端は野獸の噬み合ひに過ぎざりしならむ。祖先の戦争には、何等武器なく、計畫なく、勝敗は身體の大小、力の強弱、數の多少に由りて定まるの外なかりしならむ。進むで石器を携へ、木片を帶ぶるに至りて、武器の精粗、亦勝敗を決する一要素となれり。木石の器具は金屬製となり、刀、槍、弓となり、小銃、大砲となり、連發銃、速射砲となり、電信、電話、軍艦、飛行機となるに至りて、山中の噬み合ひに始まりたる同族間の喧嘩も、智識的競争と變じぬ。野蠻時代の名殘を最も露骨に留め

たる戦争に於てすら、此の如しとせば、況して其の他に於てをや。

人類の歴史は、一面智識の發展史なり。人類の努力は、合して智識發展の爲に貢獻しつゝあるなり。一地に停滞せず、断えず進歩するは人類の特徵にして、他動物と異なる所、之を一個人に見るも、其の經歷は進歩のそれなり。狗兎にも進歩なきにあらず、先づ眼明き、四足力づき、全身強大となり、多少智力類似の能力さへ現はるゝを見る。然れども、犬の發達には越ゆべからざる制限あるが如く、幾世を過ぎ何十代を経るも、同一徑路を繰返すに過ぎず。猿は骨格、人類に近く、性質亦敏なり、されど其の能力の發達區域甚だ廣からず、唯二三種の舞踏を學び得るに過ぎざるなり。單り人のみは殆ど際限なく進歩す。若し生れし儘にてありたらんには、最も憫むべき一動物に相違なしと雖も、飲食を覺え、歩行を習ひ、言語を學び、斯くて多くの學藝に達し、數千年に亙る犧牲の結晶たる智識を

ば、一朝にして自己の所有となし、其の上己が發見を加ふ。實に人類として個人としても、進歩は人の特徴、然り、唯是れ人の特徴なり。

進歩は、人の特徴にして、亦自然なり、當然なり、故に完全なる人を見出さんとせば、之を最も進みたる人に得べし。生れながらなる蠻人には、人の面目現はるゝもの甚だ僅少なるを免れず、完全人に缺く可からざる要素の一は、言ふまでも無く智識なり。我等は茲に智識を以て完全人を成すの一要素といへり。之を承認する者は、人に取りて智識は不自然なる附加物にあらずして、當然の性質の一面なるを知らべきなり。是に於て吾等は智識發動を以て本性の發揮となす。

經驗派の哲學者に従へば、人心は白壁の如く、書くに從ひ形體をなす。智識といふは、畫かれたる繪畫にして、生れつきの所有にあらず。心は元來白壁に過ぎざるなりと、此の議論にも一理なきにあらねど、人の心に



は白壁と異なる點あり。白壁は他人の畫くを待つのみなれども、人は自ら畫き或は拒む、自ら勤め或は怠る。人の發達に關しては、外部の關係大ならざるにあらずと雖も、主動者は彼自身なり、人の智識的進歩を以て正當の課程と見、他の動物に異なりたる受動力を有するを承認せば、教育の助けを待ちて進歩するとしても、人を以て本來智識的存在とするの當らずや、吾等はソクラテスと共に、教育を以て産婆術と目する者なり。本來有せる性質を發揮するを教育の本領となす者なり。

○人類の歴史は、一面智識の發展史なり。發展史といへば、勿論現在未だ完全なる智識の現はれざるを意味す。然り、完全なる智識現はれざるが爲に、時に過誤なきに非すと雖も、我等が知りたる人類の歴史と、現在の事實とに照して、智識は人の本性に屬するを知る。人は本來合理的存在なりと斷するも、敢て附會の獨斷とも謂ふべからざらむか。

## 二 道德心

單に智識的方面より觀れば、人生は慘憺たる戰場なり。砲聲の天地に轟くなきも、それにも勝れる修羅場なり。優勝劣敗弱肉強食の世は、正に是れ敵中の生活に異ならず。然れども、こは唯一面のみ。他面に於て優者が劣者を勞はり、強者が自己の肉を弱者に與ふるあり、即ち道德的方面是れなり。吾等は前項に於て智識的進歩を人に取りて順當なりとし、智識を人の本性に歸したりしが、今亦道德的進歩を人に取りて順當なりとし、道德心をもて人の本性に歸せむとす。

一派の學者は、所謂道德行爲を舉げて自利自愛心の發露となす。彼等に從へば、本來人には他愛心などいふものあるなく、唯一時自利自愛心を全うせんが爲に、或は飾よそひ或は枉よこしまげて他愛的行動を敢てするなり。然れども吾等の經驗に依れば、全く之に反す。故教授ドラモンド氏は、原始

動物時代に於ても猶ほ他愛心の萌芽を見る。母體が産兒を哺育するに當りて特に著しく現はる。これなくむば生物は全く發達し能はざるのみならず、存続することすら難かりしなりと説けるが、原始動物時代はさて置き、吾等は日常目撃する所にて、母親が嬰兒に對する心情や、前後不覺に眠れる耳にも、尙ほ嬰兒の泣聲を聽き漏らさず、聲に應じてムツクと起くる様子など、飾ふにも非ず、力めてなすにも非ず、又學んで後に得たるにも非ず、正に是れ本性の現はれたるものに非ずして何ぞや。

利己心を惡み、犠牲を貴ぶは人の常なり。何故に赤穂四十七士が義士の鑑として尊敬せらるゝかを思へ。彼等は國法を破り貴人を殺害せし者共にあらずや。國法を破り貴人を殺害せる者にして、今日に至るまで諸人の愛慕を受けて毫も衰へざる所以のものは、彼等が身命を賭して君家の爲に盡したる犠牲の精神に由る。我等既に他の犠牲を敬慕す、我が

が本性に犠牲を喜ぶ心あるに由らずとせむや。

或は曰ふ、道德は國家を治め、各人の安寧を計るべき好手段として、達觀の人、即ち聖人の教示せる所にして、人の本性に關係ありと思はれずと。然り、古來幾多の聖人起りて、道を説き民を教へたる爲に、著しき道德上の發達を來したるは争ふべからざる事實なり。然れども、彼等が説きたるは人の道なりき。鳥の道を説きて飛ばしめんとしたるに非ず。亦魚の道を説きて游がしめんとしたるにも非ざるなり。彼等は人の性に從ひて人の道を説きたるにて、決して性に逆つて教へたるに非ず。聖人自ら人たる以上、其の教ふる所、亦人の性に從はざるを得ざるなり。蟹の穴は其の甲に似るとかや、聖人の教、單り其の本性に似ざらんや。

教育を待つて道德性は始めて現はるといへば、一面に於て人に道德的教育に對する受動力あるを證するものなり。猿と人とを一教場に集

めて道德教育を施して見よ。道德的義務及び責任を學び得るもの、唯人のみなるを知るべし。然り、人のみ道德進歩の可能性を有す。而して此の進歩が人に取りて當然ならば、道德心は本性に屬するものにして、後の附加物には非ず。世に悪人多ければとて、我等が此の確信は毫も減少せざるなり。誰人も悪人を以て完全人とはなさざるべく、善人を見て之を慕ひ、之にあやからんとするならむ。是れ本性善なる故にあらずや。人の本性善にあらず却つて悪なるか、又は善悪無差別なりしならむには、世に悪行といふは無かるべし。何故なれば、人性悪ならば悪行は正當行爲なり。正當行爲ならば、責罰忸怩の念は伴はざるべく、従つて悪行はあるべからざればなり。

世に道德的存在と無道德的存在とあり、無道德的といふは、惡本位に

あらず、善惡無きをいふ。我等が知れる限りに於ては、惡を以て本性とするものあるなし。犴猛なる野獸や、狡猾なる蛇を以て惡の標本となせるかの語句、古來の文學に散見すると雖も、是れ唯形容語のみ。彼等が人を殺すも物を盜むも惡とは謂ふべからず。彼等本來道德的存在たらざればなり。凡そ道德的存在たるに、少くとも二個の條件あり。行爲選擇に關して意思の自由ある事は其の一。正邪善惡の行爲を辨別し、惡を棄て、善に遷らんとする良心の働きあることは其の二なり。我等が知れる限りに於て、人以外の動物に意思の自由と良心との存在するを吾等は信じ能はず。故に一括して彼等を無道德的存在と名け、人を以て道德的存在となせるなり。

然らば人には意思の自由ありや、又良心ありや、抑、意思の自由と良心とは如何なるものか。

(二) 意思の自由。意思といふは何を爲さむ如何にせむと判断し決定し、且つ實行する力なり。人が或行爲を爲さむとするに當りて、或は慾願し、或は妨害するなど、内外に幾多の暗示起る。即ち之を内にしては嗜好、慾望、智的判斷、道德心、また信仰など、之を外にしては社會境遇の狀態、交友の關係等、是等内外よりの暗示は、結合して行爲を刺戟し、鼓舞し、又は阻止し、變更せしめんとす。此の間に立ち、決然として行爲を爲す。内外事情の奴隷たらざる處に意思の自由は現はるなり。

されど、古來意思の自由に反對の説あり、今其の主なる四種を擧ぐれば、

第一、宿命説なり。曰く、人の運命は前世より一定せるにて、善行を勵むも、惡人に陥るも、其の他貧富、幸不幸など、凡だ動かし難き自然の運命なりと。此の説に従へば、意思の自由は迷妄のみ。

第二、必然説なり。曰く、總ては原因結果の連鎖に外ならず。人の行爲も、因果てふ連鎖の一環のみ、一の行爲は或原因の必然的結果に過ぎずと。此の如く原因と結果と必然的に繋がりに行くものならば、其の間毫も自由は無し。

第三、豫定説なり。曰く、人事百般のこと、豫め神の定めたる外に出づべからず。大小と無く、神の豫定は、此の世に實現するなりと。神を有意有情者と信するあたり、第一、第二と異なれども、意思の自由を拒む點に至りては即ち同一なり。

第四、決定説なり。曰く、總て道德行爲の取捨選擇は、其の人の品性次第にして、其の間自由在るに非ず。自由の選擇に由らず、品性によりて決定せらるゝなりと。既に品性といへば、勿論或感化が人に及ぼす力を拒むにはあらねど、意思の自由は認められざるなり。

意思の自由に關しては、此の如き反對諸説あり、而して何れにも多少の道理あり、特に第三、第四の如きは、確に真理の一面を現はせり、而かも吾等は意思の自由を拒むまでに至らず、吾等の實驗が之を承認せざればなり、吾等が日常の經驗は意思の自由を證明して餘りあり、即ち或行為を爲すに當りては、以前の關係にして行為の原因をなすあり、神の心や自己の品性の刺戟するもあるべけれど、其の行為を我行為と意識して自ら責任を感ずるなり、種々の情實の纏綿するありて、餘儀なくされたる行為に對しても、我行為として責任を感ずるなり、ア、此の責任の念、是ぞ我等が自由者たる徴證か。

されど吾等の自由は絶對的ならず、上述せる諸種の反對説が勢力を逞しうするも無理ならぬ程、幾多の制限を有す、即ち左に之を擧げむ、第一は外部的制限なり、意思の自由といへど、吾等が自由に取捨選擇し能

はざるもの少からず、寧ろ自由の範圍極めて狭少なりと謂ふ可きか、先づ吾等は民族選擇の自由を有せざるなり、次に父母の選擇に關して自由を有せず、又誕生に關して全く自由なし、何時何國に某種族中何某を父として出生せるは自由選擇によらざるなり、幼年時代の境遇貴賤貧富など、亦自由に選擇し改造し得る所にあらず、其の他現在に於ても、周圍の事情、我以外なる人の心など、我等が自由の達せざるもの極めて多し、而して是等が我等の内心に諸種の影響を及ぼし、感化を與へ、我等の意思を彩色しつゝあるは拒むべからざる、事實なりとす。

第二は内部的制限なり、意思の自由は心中に一致を缺き、調和を失ふ場合に於て、痛ましくも滅殺せらる、即ち或行為をなさんとするに當り、之に反抗心生ずる爲に自由は敗るゝなり、パウロが、我れ爲さんと欲する事をなさず、却つて爲すまじと思ふことをなせり、と曰へる、正に心中

の不調和不一致を表白せるものなり。此の場合に於ては、心中の状態、恰も君主なく法規なく、悪人跋扈するも如何ともなし難き亂世に似たり。一の慾望が一揆を起して意思を強迫し或感情がストライキを起して意思を苦しめるなど、心中の平和全く亂れて、パウロの如く「ア、我れ憐める人なるかな」と叫ぶの外無きなり。耶蘇が「惡を行ふ者は惡の奴隸也」と教へたるも、道理や、不道德に中毒されては、漸次自由は滅殺され、遂には全然低能兒となり了らざるを得ず、實に理想的自由は完全なる道徳生活に於てのみ、發見せらるべきなり。

上述の如く、内外兩面の制限によりて、意思の自由は滅殺せらるゝと雖も、全然消滅したるに非ず。心中の調和成り綱紀舉がるに従ひて、一旦反抗せる亂民も、各、其の所を得て良民と化し、意思てふ國王の命に服従するに至るべし。内部の調和茲に成り、意思の力強くなれば、外來の勁敵

に打勝つこと必ずしも難からず。即ち逆境に耐へ、不幸を忍び、心中常に平靜にして、患難に處して尙ほ喜ぶを得べきなり。

(二) 良心 人は自己の行爲に對して、或は賞め或は責め、或は喜び或は恥づ。此の能力こそ世に良心と名けらるゝものなれ。人が良心を有するは道徳的存在たるの證なり。若し此の力なくば、人は無道徳的存在たり。即ち善惡無差別的的存在たるなり。世に悪人を指して「良心無き者」と呼ぶは誤れり。良心なくば悪人にもあらず、亦善人にも非ざるなり。如何なる悪人たりとも、人たる限り、全く良心を持たざるは無し。良心無しと呼ぶるゝは萎靡して殆ど其の力を失へるなり。曩に吾等は心中の不調和に由り、意思の自由の滅殺さるべきを告げたるが、良心も亦屢、壓迫せらるゝに従つて衰ふ。愈衰へて人は人たる本領を失ひ、惡を惡とも感せずるに至るなり。

抑、良心とは何ぞや。我等は之を學びて日常生活に益、其の力を發揮せんとするなり。

イ、道徳的義務の觀念。或行爲をなして自ら賞讃するは、當然爲す等の事を爲せりと認むるもの。或行爲に對して自ら責むるは、當然爲さぬ等の事を爲せりと認むるものなり。世に善といはるゝは、爲す等の事、惡といはるゝは、爲さぬ等の事に附したる名稱なり。而して既に「爲す等」又「爲さぬ等」といへば、唯一の標準ある譯なり。其の標準に従ひて行爲せざるべからずといふ前提より「爲す等」と「爲さぬ等」との二個の等は現はれたるなり。即ち良心とは、或標準に従ひて行爲せざるべからずてふ道徳的義務心とも謂はるべし。さらば或標準とは何ぞや。義務心の對象は、そも何物なりや。

ロ、義務心の對象。可及的多數の人に可及的大なる幸福を與ふる

を善となす所の功利派に従へば、國家社會、即ち最大多數の人は義務心の對象なり。此の説によれば、道徳行爲は、それ自身に於て價值あるにあらず、多數の幸福といふ結果を生み出す手段たるが爲に貴きなり。是れ我等が同意し難き所、吾等とても固より國家社會の幸福に反對するにあらねど、こは行爲の結果にして、目的にはあらず、然るに眞の善行は、それ自身に於て眞珠よりも貴かるべきものなり。

直覺派倫理學者は曰く、人は本來良心を有するを以て、事の正邪善惡は思慮を費すまでも無く、直ちに判別せらるゝなり。孝行忠義の善なるは説明を要するまでもなく、良心の指示に由りて明瞭なりと、此の派に従へば、義務心の對象は良心なり。我等は良心を道徳的義務の觀念となし、一步を進めて義務心の對象を求めんとせるに、直覺派に由れば、再び出立點まで舞ひ戻れる譯なり。されば吾等は直覺派に反對せんとする

に非ず。良心を承認するに異存なしと雖も、我等は唯一歩を進めて究めんとするのみ。

所謂カントの形式説に由れば、各自の心に銘刻されたる道徳的命令あり。こは各人の意思が明かに承認する所、人は何等の條件なく此の命令を遵奉せざるべからず。カントは名けて之を無上命令と呼ぶ。善とは其の命令に従ふをいひ、悪とは其の命令に背くをいふと。茲に至りて吾等は饑渴を醫されたる感なき能はず。道徳心の普遍的なるも解せられ、吾等が曩に經驗する所の服従心様のものをも、聊か會得せられたるやの思ひあればなり。

然れども、一步進みて考ふれば、普遍的命令に従はんよりは、命令者に従ふは寧ろ根本的ならずや。命令法則は末にして死物なり。命令者立法者は本にして活物なり。子女を教訓するに當りて、父の命令に従へと言

はんよりは、父に従へと言ふの勝らずや。

義務心は茲に明かなる対象を得たり、即ち宇宙の本體にして統轄者たる神なり。神に従ふはそれ自身貴き善なり。命令の遵奉、良心の平和、また永久的社會の幸福をも、神に従ふ結果として完成さるべし。

良心は神に對する服従心なるが故に、柔順に服従するに伴ひて、其の力旺盛となり、反抗度重なりて萎靡銷沈を極むるに至る。是れ我等の經驗が證明する所なり。

意思の自由と良心とは萬人共通の能力たり。如何ほどに此の力を發揮したりとも、決して過ぐる憂ひはあらず。進むに従ひて吾等の本性は益々現はる。茲に至りて道徳心は、後の附加物に非ずして、人の本性に屬すること愈々確められたりと謂ふべし。



### 三 宗教心

七八

(一) 宗教心は人の本性なり。吾等が既に緒論に於て述べたるが如く、宗教の歴史は、人類の歴史と其の年代を等しうし、人類が人類として自己を發見するに先ちて宗教は存在せり。原始時代に近き程度にある蠻民が、現在一種の宗教を有するは其の證たらずや。然り、宗教が人類社會に普遍的なること、知識・道德心の普遍的なると、毫も異なるなし。人は總て知識的存在なり、一二除外例の痴愚ありとも、知識が人の本性に屬するを拒むべからず。人は總て道德的存在なり。一二悪人のために道德心が人の本性に屬するを否定すべからず。同様に人は總て宗教的存在なり。吾等自ら信仰なき折には、爾しかく信じ能はざりしを以て、未信の人が之を拒むも、強ち無理に非すと雖も、自己の信不信を以て、人生の事實を變ふべからざるなり。胃あり腸あり、食ふは人の持前なり。若し正當の食物

を得能はずむば、小石や豆莢をもて満たさんとす。迷信は小石豆莢の類、信仰的胃腸を害ふこと甚しと雖も、元はといへば、胃腸の切なる要求に出でたるなり。

饑渴者の飲食を求むるにも勝りて、人は信仰を求む。實に鹿の谿水を喘ぎ慕ふ如く、人は神を慕うて已まざるなり。知識・道德心と等しく、宗教心をもて人の本性に歸したる、敢て牽強附會の獨斷にも非ざるべきか。總ての大宗教には創立者あり、中心的人物あり、また訓育指導の任に當れる者あるは事實なり。然れども、こは人に宗教心の自然なるを拒むの理由とはならず。如何となれば、彼等が人に宗教を傳へたるは、裏庭の泉水より、家鴨を放ちて大河に游がしめしに等しければなり。泳ぐは家鴨の性なり、誰教ふるなくも裏庭の泉水に泳げるは其の本性に従へるに外ならず。宗教的大人格の世に出でざる以前に於て、裏庭の泉水たる

七九

宗教は既に存在せり。佛教以前に、印度にはバラモン教あり、基督教以前に猶太には所謂猶太教ありき。即ち大人格出で、人の性情に従ひ、泉水より河水に放ちやりたるもの、基督教及び佛教となれり。

宗教心を人の本性たらずとせば、傳道は徒事なり、千萬の言語を盡すとも、家鴨を陸上に住ましめんとするの類にて、到底其の甲斐あるべからず。宗教心が人の本性たらずば、傳道の爲に身命を賭する者も無かるべく、之を知らんとて腦漿を絞るものも無かるべきなり。吾等之を筆にし、諸氏は之を讀む。此の事實こそは人の本性を暴露せるなれ、亦那邊にか證據を求めむ。

宗教心が人の本性に屬するものならば、吾等は知識道德を修むると共に宗教心を養ひ、益、本性の發揮に力めざるべからず。然らずむば吾等は不具者たるを免れざるなり。手足を缺くも忍ばるべし、腦髓を缺くに

至りては耐ふべからず。吾等が淺き經驗に由りて、宗教心の發揮せざりし昔を思へば、全く腦髓なき病者たりき。生活に標準なく、行爲に一致なく、左支右梧、取り留めなき様、旅人の途を失へるに似たりしなり。而して是れ信仰に入りたる人の一様に經驗する所。

(二) 宗教心とは何ぞ。普通に宗教心は一種の感情と思はるゝが如し。元より感情を排斥するものに非ずと雖も、感情のみにあらず。心理學上の術語を借りて言へば、知識と意思をも含むなり。倫理學上の用語を借りて言へば、良心を含む。一言にいへば、智識とか意思とか其の他一の働きに偏せるにあらず。全人格が人以上の存在(我等は之を神と呼ぶ)に對して有する畏敬、信賴、感恩、懺悔及び義務の念を宗教心といふなり。高山大河の靈異に打たれて「何ものもの」の在はしますか。は知らねども、かたじけなきに涙こぼるゝを覺ゆるは畏敬心あるに由る。畏敬心は恐怖心と

誤られ易きを以て、宗教心は恐怖心に根ざすと論ずる學者これ無きに非ずと雖も、兩者間には天壤も霄ならざる相違あり。恐怖心は雀の鷹に於ける如く唯畏縮せしむるのみなるに反し、畏敬心は子女の慈父に於けるが如く、敬と愛とを含むが故に、信頼心を喚び起すなり。本來人は宇宙に對して絶對的獨立者にあらず、胎兒の母に於ける如く、其の養分を受け初めて成長す。されば宇宙本體に向つて畏敬信頼の念を有するは、誠に當然爾あるべき理なり。文化の度甚だ低き未開時代に在つては、恐怖利用などの病的現象多く現はれたれど、其等を通して宗教心の健康状態を洞察すること決して不可能にはあらず。

父母に對して畏敬信頼心の萌芽を有する幼兒は、漸次成長するに従ひて、今日まで受けたる恩義を覺る、而して生命を以て孝養を盡さんと決心するに至る。宗教心を亦之に等しく、畏敬信頼の念は感恩の情を生

み出す。而して懺悔は感恩の情と共に湧き、報恩的義務心起る。是れ宗教心發達の順序なり。

或は宗教心を以て一概に人の弱點となすもあれど、信仰の力に依りて悪人が善人と化し、世に害ありし人物が益ある者と變り、外部の波瀾に打勝つべき内心の一致調和成り、之を約言すれば、信仰に由りて人が益、完全人に近づくとせば、宗教心を人の弱點とするは當らじ。

吾等の經驗に依れば、人は夫れ二階建家屋の如きか、二階は智識、階下は道德心、而して床下の地形は宗教心なり。人動もすれば表面に現はれ出でたる智識を偏重す。階下(道德心)堅固にして階上(智識)を支持するに足らざれば、風雨至るに及んで、極めて危険なるを思はざるに似たり、而して床下の地形(宗教心)が一家の安全の爲に如何ばかり重要なるかに

至りては、之を知る者甚だ少なし。或は智識、道德、宗教を、明と暗との如く互に相反するもの、様に思ふ者あれども、开は甚だしき曲事なり。之を宇宙本體に對して考ふるに、智識は之を理解せんとし、道德は之に服従せんとし、而して宗教は之に抱合せられむとするなり。理解して服従し、而して後抱合一致するは正當なる順序の如くなれども、多くの場合に於て、智識は事實に後るゝを常となす。美味<sup>ミツメ</sup>を知りて食するに非ず、食して後に覺るなり。凡そ愛せざれば愛を辨へず、信せざれば信を解するに由なし。信じ又愛し、而して後、宇宙本體の何なるかを理解する節<sup>た</sup>あらむ。是に於てか智識は基礎を得たりと謂ふべし。古人が神を識るは「智識の初なり」と教へたるも道理なる哉。然れども吾等は神を識るは「いはむよりは、寧ろ神を愛するは」と曰はまく欲するなり。神を信じ、之を愛するは、一切の基礎、罪惡の外、此の

基礎に立たざるものなし。然り、宗教心は唯罪惡と相容れざるのみ。

### 第三節 靈魂不滅

#### 一 靈魂不滅の意義

宗教とし曰へば、總て靈魂不滅の信仰を有するやに思はれ易きも、吾等が解釋せる意義に照せば、必ずしも然らず。精神的現象を擧げて腦髓の作用に歸する唯物論者は、本來靈魂の存在を承認せざるが故に、靈魂不滅を迷妄となすも亦餘儀なき次第なるが、自然界の森羅萬象を其の儘神の顯現となし、自我の意識を迷妄と認むる汎神論者も、吾等より見れば、靈魂不滅を取らざる者なり。彼等の中、或は靈魂不滅を主張する者あれども、其の不滅は宇宙大心靈に歸滅するの意、彼等に從へば「我」と宇宙大心靈との關係は、恰も小波の大洋に於けるが如きものにて、本來「我」

は存在せず、唯大洋のみ存在するなり。大洋即ち宇宙大心靈の小波動が此の世に於ける假りの「我」ありといへば在る様なものなれども、是れ常識の迷妄に過ぎず、存在するは唯宇宙大心靈のみ、されば汎神論者は不滅に加へて不生を説く。然り、彼等に取りては「我」は不生、不在、不滅なり。古老の話に聽く、昔或國の王女、奇病を煩ひ、國手名醫の數を盡して治療を加ふるも寸効無きに當りて、神託あり、曰く、曾て一人も其の藥を以て人を殺したることなき醫を招ぎ、之に命じて主治醫たらしめよと。乃ち全國に求めて僅に一人を得たり。彼は開業後三年を経過すれども、數醫たる評判の故を以て、未だ曾て一人の患者を得ず。従つて一人も殺さざりしなり。讀者諸君笑ふを止めよ、汎神論者の不滅論は所詮此の如きのみ。我等は自意識に現はるゝ「我」の實在を信じ、之を以て一切智識の基本となす。唯物論者は物質を其の儘實在と認む。是れ最も確實の様なれど

も、「我」に比すれば未なり。汎神論者は、宇宙大心靈を以て實在となし、「我」を以て假象と認む。然れども、經驗の順序に由れば、「我」は本にして、一切の「我」以外は未なり。本たる「我」が假象ならば、「我」以外亦假象たらざるを得ず。本たる「我」が虚無ならば、一切の「我」以外亦虚無ならざるを得ざるなり。再び曰く、「我」は一切智識の基本なりと。

我等が「我」の實在を信ずるは、議論の結果によらず、性質の傾向に従ふなり。古來學者好んで議論をなす。近世哲學の鼻祖と仰がれたる佛國デカルトの如きも其の一人なり。彼一旦懷疑に陥り、從來信せられたる一切を疑ひ始めたり。而かも彼が疑ひ能はざりしもの一つ残れり。何ぞやといへば、其の疑ふことなり。彼は疑ふことを疑ひ能はざりき。疑ひは彼に取りて事實なりき。即ち疑ふものゝ存在は事實となれり。是に於て彼は「我」の存在を信せり。曰く「我れ考ふ故に我在り」と。老年に至るまで、毎日

幾何學の研究を續けたる人だけありて、所論飽くまでも幾何學的なりき。また彼はスコラスチズムを離れて新機軸を出さんと企てたれども、尙ほ舊臭を脱し能はざりしが如し。我等が「我」を信するは、三段論法的方式に由りて試験したる結果に非ず。一切智識の基本として、性情の傾向に従ひ頭かたまから「我」の實在を信するなり。考ふるが故に「我」は存在するに非ず、先づ存在するが故に考ふるなり。

吾等の經驗に由れば、考ふるものたる「我」は、物質にあらず、物質以外には非ざるべきも、物質以上なり。人體を組織せる物質は、断えず變化しつつあれども、「我」は一貫して變るなきなり。小兒時代より、青年、壯年、老年と進むに従ひて、外形の「我」は遷るといへども、裏なる「我」は嚴として動かす。八年以前よりの舊債の督促を受けて、あれは先代の「我」にて現在の「我」にあらずと陳ずるとも誰か之を眞とせむや。

不變なる「我」は、宇宙大心靈に非ず、神に非ず、佛にもあらず、乃至我以外の何物にもあらず。喜び或は悲しみ、憂ひ或は樂しみ、激し或は和らぎ、信じ或は疑ひ、工夫し或は考索するなど、經驗の主體は即ち「我」にして、他を以て代ふべからず、又混すべからざるものなり。

吾等が靈魂不滅といふは、此の「我」の不滅を意味す。有り觸れたる靈魂不滅の語を使用したれども、實は人格不死、或は永生と名づくべかりき。即ち記憶感情の主體たる「我」の不滅不死をいふなり。勿論肉體は必ず一度活動を停止し、分解し、還元して、再び他の形體に變るべし。而かも「我」は永久に我として存續すべきをいふなり。我が子孫後裔の繁榮をいふにあらず、又我が感化の永く遺るをいふにもあらず。元より我が姓名が歴史に傳へらるゝをいふに非ず。唯「我」自身の永久存在を指して靈魂不滅とはいへるなり。

靈魂不滅信仰の前提たるべき靈魂の存在にして、議論を待って信せらるゝに非ずとせば、靈魂不滅に證據呼ばりを爲すの愚なるは明かなり。吾等は茲に證明せんとするも能はず。唯二三の暗示を擧げて信仰の補足たらしめんとするのみ。

(一) 人生事實の暗示。教授サルモン氏曰く、研究せられたる限りに於て、死後何等かの状態に在りて存続するてふ信仰は、人類共通のものなること明かなり」と。古今東西を通じて、人類の通常生活に現はるゝ所によれば、總て人類は靈魂不滅を信じたるが如し。今を隔つる三千五百年、即ち佛教以前に於ける印度の古き經典にも、限りなく死せぬ世界に、永久の光と榮あり」と記されたりと。プラトウに由れば、ソクラテスも亦、死後存続を信じたり。彼が毒杯を手にしながら諄々と靈魂不滅を説き

たるは名高き話なり。プラトウ自身も、それを信じ、又屢之を弟子等に教へぬ。宗教心篤き希伯人が信じたるは言はずもがな。哲學としては汎神的傾向を帯び、不生不滅を説き、人の生命をば如露如電と見做せる佛教ですら一般普通の信仰は何れかといへば、靈魂不滅に傾きたり。野蠻人の宗教には祖先の尊靈を祀るもの多し。是れ不知不識の間に、死後存在を信じたる故に由らざらんや。此の世の希望絶え果てゝ自ら縊れ死する人は、漠然ながらも死後存在を信じたるなり。永久の旅路に向はんとする重患者には、日頃宗教熱心家たると否とに關せず、來世を望むらしき様の見逃し難きものあり。吾等一日經つ毎に死期に近づくとは知りながら、明日を々々と待ち望むの常なるが、其中暗々裏に來世を樂しむ信仰仄見えすとせんや。

或は自ら意識せるあり、或は自ら全く意識せざるあり。意識せるが中

にも、程度に於て、種類に於て、吾等が信ずる所と異なるもの多しと雖も、  
 兎にも角にも、人生々活の事實は死後存続の暗示に富む、吾等が此の間  
 題に興味を感ずる事實それ自身既に大なる暗示たらずむばあらず、

如何なる心理現象かは知らねど、今日は何某から便りが来りさうな  
 と漠然と感ずる時に、案の通り來ること多し、噂をすれば影の俚言も屢、  
 適中して吾等を驚かす。死後存続は漠然ながら一般に感せられ、而して  
 噂せらるゝこと頻繁たり。元よりそれは何等の證據にあらずと雖も、無  
 意義なりとて葬らるべきものに非ず、吾等は死後存続に關して、人生生  
 活の事實中、貴き暗示に富めるものあるを認むるなり。

(二) 進化論の暗示。進化論者に從へば、我等の周圍に展開せられた  
 る宇宙は、元來單純なる状態にありしが、漸次進化し發展して、複雑とな  
 り、無機物より有機物を生じ、動物を出し、益々進化して人類を生み出せり。

敢て他の動物の承諾を経たるにあらずと雖も、人類を以て進化の絶頂  
 となすは、人類たる吾等の判断としては亦已むを得ざるなり。我田引水  
 論がば知らねど、他の動物君も、人類の此の決定に對して不服無きもの  
 の如し。然り、人類は宇宙進化の頂點なり。萬物は人類を生み出す爲めに  
 自ら進んで犠牲となり、苦惱せるなり。而して殆ど總ての進化法則は、人  
 類によりて繼承せられ、現今に在りては自然界の進歩すら、人類を中心  
 となすもの多し。今日に於ける人類の生活には確かに進化の面影を偲  
 ばしむるものあり。

一言に人類の進歩とはいへど、其の進歩は主として心靈的方面に屬  
 す。人若し宇宙進化の目的は那邊にありやと問はゞ、吾等は心靈的發達  
 にありと答ふるに躊躇せざるべし。實に心靈の發達は、萬物進化の唯一  
 目的にして、他は總て其の爲めの準備たり、且つ、手段たるに過ぎず、之を



學校に譬ふれば、心靈發達は本科、物質的進化は豫備科なり。豫備科の課程は、それ自身に於て目的を有せず、本科に入らんとする手段たるなり。吾等は今進化學校の本科に入りたるなり。手段より目的に移り山麓より山頂に達せるなり。

之を個人の進歩に觀るに、母の胎内にて諸種の階級を經過し來り、生れ出づるも未だ飲食運動すら自由ならず、身體諸機關漸く整ふに及びて、心靈方面の發達始まる。此の場合に於て、心靈は主人の如く、身體諸機關は奴隸の如し。四枝五管は舉つて心靈の爲に奉仕の役を務む。此の主人たる心靈が、奴隸たる肉體と共に朽つることもあらば、進化は目的を失ひたりと謂はざるべからず。奴隸たる肉體は、無駄骨折りたる譯となるなり。

母胎に宿りて、發達し變化し行く個人の様は、原始的生物より漸次進

化して人類に達したる課程を示すとの説は、恐らく眞なるべきか。一法則の行はるゝか。人類と個人との區別あらむとは思はれず。是に取りて眞ならば、彼に取りても亦眞ならざるべからず。さらば宇宙の進化は人類を目的となし、人類の發展は心靈的方面に移りて無窮に永續するとせば、單り個人のみが心靈的發達の首途に就きながら、造作も無く消滅することのあるべきか。或は曰ふ、人類としては其の心靈的方面に於て永久の發達を見るべきも、一個人としては五十年或は六十年存生して、人類全體の進歩に歸與貢獻するに過ぎず。一應道理らしき説なり。雖も、是れ人類全體と一個人とに各別の法則を適用せるものにて、進化論の根柢を破壊せるもの、吾等は人類全體に取りて眞理ならば、亦一個人に取りても眞理なりと信ず。

宇宙の進化は、心靈的發展を以て其の到達すべき目的點となし、而し

て人類世に顯はれて初めて、其の目的茲に完成せられむとし、有形の進化は無形の進化に移り、斯くて發展し行くものならば、同様に個人の進歩にも心靈的に移りて、初めて無窮なるべきにあらずや。

(三) 道德心の暗示。道德心が人の本性に屬することは既に述べし所なるが、其の實際發揮せる状態を觀れば、誠に憐れむべき有様なり。大に現はるべくして而かも未だ現はれず、大に發展すべくして而かも未だ發展の端緒にだも就かざるもの、人生道德の現状にあらずや。道德的に人生を觀れば、現世は唯夫れ豫備校の如きか。若し現世にて終るものならば、人は永久に未成品なり。人形師が人形を作るに當りて、頭胴手足に精巧を極めながら、目口を畫かずして持ち去りしならば、他の室にて心靜に足らざるを補ふを以て當然なりとせずや。折角精力を込めたる人形を、未成品の儘に賣出す者も無かるべく、況んや未成品の儘にて破

毀して土に歸らしむる者のあるべしや。

我等の良心は、嚴密に善因に善果あり、惡因に惡果あるを豫期す。道德心を承認し、道德法を信するならば、此の道德的因果の精確なるべきを疑ふべからざるなり。然れども、此の世の事實は屢、此の信仰を破壊せんとす。例せば、比較的善良なる人にして、不幸患難に惱めるもあれば、不正行爲を恥ぢざる程の人が、却つて榮華の快樂に飽けるもあり、其の他正直なる良心が怪訝に堪へざるもの、枚擧に遑あらず。道德法とは實際存在せざるものを、人が強いて作りたる幻影に過ぎざるにあらずや。若し然らずして公平無私なる道德法の存在が眞ならば、其の法の行はるる範圍は此の世限りにあるべからず。此の世に於ける缺陷の總てを補はるべき靈界の存在を信せざるを得ざることゝなるなり。

茲に馬琴などが物せる如き小説の一部二卷なるがありとせよ。其の

上卷には悪人白晝に横行し、忠孝の士は貶けられて用ひられず、讀み行く中に切齒すること幾回なるを知らざるなり、再三再四書を地上に投じて、人情に悖れるの甚だしきを憤慨す、而かも忍びて下卷に移れば、溜飲下れるの快を覺ゆ、而して前に憤慨せるの早急なりしを恥づ、現世の狀態は上卷に似たらずや、これだけにては物足らぬこと多く、下卷を待ち始めて完かるべきの感なきを得ざるなり、道德心の公正なる要求は死後靈性の存續を暗示するものと謂ふ可し。

(四) 宗教心の暗示。宗教心は對人關係に非ず、對超人關係なり、超人の意義次第に由りて明確の度に差異あるは免れ難きも、有形界以外に實在者を認むる點に至りては則ち一なりとす、從つて有形界たる現世以外に、靈界の存在を承認する點に至りても亦、總ての宗教相似たるものあり、されば宗教的經驗に訴ふれば、靈魂不滅に反對すべき何物もあ

るなし、宗教といへば、總て靈魂不滅を信するかに思はるゝも、強ち無理にはあらず、宗教心それ自身、空間的に於ても、時間的に於ても、無限無窮界に住めばなり、在來の宗教中、其の哲學方面に於ては、不生不在不滅を説きながら、實際生活に於ては、靈魂不滅の信仰者多かるは、冷靜なる哲學に慊らざる宗教心の力なるか、通俗佛教中に於て、地獄極樂は涅槃に超え、救済が解脱に勝りて力あるも、宗教心發動の結果に外ならず、實に空間的にも、亦時間的にも、無限無窮に擴張せられたる世界の住者たる宗教心は、其の儘靈性不死を暗示せるなり。

若し夫れ進んで耶蘇基督を信じ、彼を通して人格的神に連なるに至らば、人格不死は抽象的問題たらずして、具體的事實となり、不死てふ消極的用語は、永生と變らむ、永生とは、永久不死を表はすのみにあらで、潑刺たる生命の甚だ豊富なるを意味するなり、然れども、こは第二章及び

第三章に進んで漸次闡明せらるべきなり。

### 三 靈魂不滅の信仰と實際生活

靈魂不滅は純然たる智識的問題にあらず寧ろ信仰道德の問題たり。意義深遠なる教理にあらず日常生活に甚大なる關係を有する事實なり。孔子は之を闡却したり生を知らずして焉んぞ能く死を知らんやといふも一面の道理にはあれど死を知らずして焉んぞ能く生を知らんやと云ふも亦他面の道理なり生は旅路なり死は到着點なり旅路たる生は到着點たる死の意義次第にて色づけらる旅人の性質は旅行の目的次第にて定まるべければならざれば生を知らずして然る後死を知るよりは先づ死を知りて而して後生を知るを以て順序とせむか死の意義が生活を彩色すること此の如く大なるを以て靈魂不滅の信仰が實際生活に及ばず影響頗る大なり請ふ其の二三を學ばん哉。

(二) 義務心。源頼朝が伊豆の邊陲に事を擧げて一旦石橋山に大敗しながら遂に平家を亡ぼして頼を鎌倉に建つるに至りたるに就いては原因多々あるべしと雖も就中重要なる一は八幡太郎義家以來本國の武人中代々源氏の家人を以て任じたる者の多かりしことなり何れの時代に在りても大事を託するに足るとせられたるは第一同族なり。第二譜代の郎等家人なり。彼等は古き祖先より遠き子孫後裔に至るまで利害禍福を共にすること故宗家主家を思ふこと恰も我身我家を思ふ如かりしなり。外様大小名や浪人者の如きは離合集散一に自家の利害を標準とするが故に今日の味方は明日敵と變り行くやも測られず。其の日其の日の傭人に至りては尙更信用すべからず然れども最も無責任なる言行に人情の弱點を暴露せること一夜泊りの旅客の如きは無けん旅の耻は掻き棄てとは能くも言ひしもの哉思ひ掛けなく一夜

を明かしたるのみにて、再び来るや測られざれば、未は野とも山ともなれ、彼等に寸毫の關係なし。十返舎一九は、東海道膝栗毛に於て、餘蘊なく「旅の耻搔き棄て主義」を現はしたり。

「東海道膝栗毛」は、滑稽なる駄洒落の中に、未來なき惻れなる人生觀を暴露せるにあらずや。靈魂不滅を信せずして、現世を假りの宿となさば、人生は、旅籠屋に於ける彌次喜太に等しからむ。責任義務など、いふ程野暮なりと笑はるべきなり。一時の座輿とならば、或は忍ぶを得むも、誰か彌次喜太の如き放埒無責任漢を信用して、之と大事を共にするを好まむや。

靈魂不滅の信仰に由りて、此の世に對するは、一族又は譜代の郎等が宗家主家に對するが如き比にあらず。一族又は譜代郎等は、其の子孫後裔の繁榮を望みて、一身を犠牲に供するに過ぎず。或は死後の名譽を想

像して僅に快感を覺ゆるに過ぎず。然れども、靈魂不滅を信する者に取  
りては、自己の行爲が、子孫後裔に關係あるに止まらず、死後現世に於け  
る我が名に關係あるに止まらず。永久に我自<sup>○</sup>身と關係あるなり。官吏は  
義務と責任とを併せて後繼者に譲るを得む。富豪は家督と財産又は負  
債とを併せて子孫に譲るを得べし。然れども、茲に誰人にも譲與するを  
許されず。永久に我と離れざる財産、或は負債あり、日々の行爲に由りて  
作りつゝある我の品性<sup>○</sup>是れなり。朝より夜に至るまで、我等は品性てふ  
住宅を、或は建て或は毀ちつゝあり。建つるとも又毀つとも、責任者は我  
なり。我に親しき何人と雖も、我が責任を代りて負ふを許されず。彼には  
彼自身の荷物ありて、力に餘裕なければなり。如何に重くとも、如何に苦  
しくとも、我が行爲の責任を、我は自ら負ふの外無し。

靈魂不滅を信する者に取りては、肉體の死と共に重き責任は解除せ

らるゝにあらず。永久に我は我として存続すること故、責任は一層重きを加ふるなり。従つて此の世に處するや、旅人の假寓に於けるが如く、又傭人の傭主に於けるが如くなる能はず。否、譜代の郎等が先祖重代の君主に對する類に非ざるなり。其の一舉一動は、己が靈性に永久不磨の影響を與ふるものなれば、細心日々の行爲に注意せざるべからず。米國女流教育家中の先驅者たるメリイ・ライオンと共に「己が義務を知らず、知るとも之を怠るは死よりも懼るべきものなり」と叫ばむ者、永久不死を信する者ならずして誰ぞや。

(二) 希望と忍耐 「我が年を経る日は七十歳に過ぎず、或は壯健にして八十歳に至らん。されど其の誇る所は、唯勤勞と悲しみとのみ。」(詩篇第九十の十節以下)と詩篇の著者が道破せる如く、勞苦は人生より別ち難きものか、出生の苦痛に始まりて死去の苦悶に終るまで、悲哀憂患は人

生を離れざるなり。此の間に立ちて内心の平和を攪亂せらるることなく、百難に耐へ得るもの、未來に對する希望に由ること多し。

何故に農夫は勞苦を辭せずして耕耘の業に従事するや、耕し、種播き、草取り、水注ぎ、さては肥料を施すなど、といへば甚だ簡單なれども、事は爾く容易ならず。而かも彼等が喜んで勞苦に耐ふるは、秋の刈入れを望めばなり。商人が零碎を積み貯へたる財囊を倒まにして放資するは、利益の回收を樂しめばなり。學生が幾度か神經衰弱に悩みながら、尙ほ鉢巻して徹宵勉學するは、後の成功を遂げん爲なり。子寶多くして窮乏に苦しむ父母は、子供等が成人せば何とかなるべしとて現在の貧苦に耐へ、瀕死の状態にある重患者も、微に快復の日を待ちて病苦を忍び、鐵窓の中に呻吟せる囚人も、放免の日を樂しみて現在の屈辱に堪ふるなり。或は自ら進みて有らゆる勞苦と戰はんとする者も、或は坐して饑ひ

来る患難を防がんとする者も、是れからてふ武器を携へざるは無し、即ち希望は人を危難中に救ひ、患難に惱める者に喜びを與ふるなり、希望なくば、吾等は有る甲斐なき者となり、希望を得ては元氣を恢復す、希望を失ひて、我は此の世に無き者に等しく、小希望を得ては小なる我は生じ、大希望を發見して大なる我は現はるゝなり。

靈魂不滅を信するは、有限なる現世以外、即ち墓場の彼方に領分を擧げたるものにて、人生の希望は、之が爲に甚だしく擴張せられたりと謂ふべし。彼方を望めば、八十歳を超えたる老人も、尙ほ自ら昨日生れたる嬰兒と等しく、行く先の遼遠なるを感すべし。打續ける悲しみの波に弄ばれ、逆風に悩まさるゝ身も、永遠の彼方なる休安の港を思ひ出して、勇氣日頃に百倍するを覺ゆべし。不治の難症に罹り、信賴したる醫師に見放されたる者も、永久不死を信じて自ら慰安を得べきなり。當に是れ他

人の事のみならず、吾等も早晚死すべき身ならずや。今夜か明日かとは不明なれども、一度は必ず死せざるべからず。思ひ見よ、不死の信仰なくして、一日を安穩に送らるべき乎。

以上述べたる如く、靈魂不滅の信仰は、道德生活と密着して離れざる事實なれば、我等は之を信じ、而して之を信する者の如く生活せんと欲するなり。斯くて、パウロと共に、四方より患難を受くれども窮せず、詮方盡くれども希望を失はず、迫害らるれども棄てられず、倒るれども亡びざる(哥林後四章八九)に至らむ。

## 第二章 宗教の客體即ち神觀

一〇八

世には有神論として神の存在を證明せんとする學問あり。反對に無神論として神の存在を否定せんとするもあり。又人智は到底神の有無を知るべからずと主張する不可知論あり。

吾等是有神論者にあらず。又元より無神論者や不可知論者にあらず。基督者として有神論ならず。といはゞ奇怪に思はるゝやも知れねど。吾等は好んで奇言を弄する者にあらず。吾等が信する所に據れば、本來基督教には有神論てふものは無かりき。異邦哲學の影響を受けたる結果、今日有神論は基督教神學の一部を占むるに至りたれど、今日とても吾等は其の必要を認めざるなり。吾等は、人觀に於て有人論を説かざりき。肉體ありや否に關しては勿論、靈魂ありや否に就いても論する所なからず。

りき性情の傾向に従ひて之を信するの外、有無に關して議論するの有害無益なるを知りたればなり。我等は、我を存在するものと頭から信じたり。我のみならず他の人の存在をも信じたり。而して單り神に關して有無の裁判を爲さんとす。吾等から觀れば寧ろ奇怪は此方にあり。

有神論は強き議論の如くなるも實は然らず。已に有神論といへば無神論や、其の他の反對論と同段に下りて自らを比較せるなり。吾等は寧ろアノ山上に侃諤の辯を振ひたりし大使徒パウロに倣はんとす。彼は多數の偶像教徒の前に起ちて居ながら、彼等を反對者として扱はざりき。パウロの眼に觸れたるアゼンズの偶像信者は、無神論者にあらず。りき。彼等は知らぬながらも神を信じたりしなり。故にパウロは神の存在を説かずして、其の力と慈愛とを示したり。我等はパウロに倣ひて、總ての人を反對者と見做さず。知らず識らず神を信じ、或は神に近づかん



として未だ達せざる者と観るの至當なるを思ふなり。

一一〇

吾等は人智の制限を知るが故に、敢て神の存在を證明せんとはせじ。我等は自己の靈性を信する如く、宇宙の本體として神を信するなり。然れども、我等は如何に神を信すべき乎に關して述ぶる所無かるべからず。神といふは宇宙本體に名けたる名稱に過ぎざれば、存在は問題にあらねど、知りたきは其の性質なり。吾等が信する神は如何なる神なりや、といふことなり。而かも吾等が説く所は、神の性質を限定するにあらず、神に關する人智の限りを盡さんとするのみ。若し此の點に注意を怠り、神學者所説の神を其の儘信じ、それ以上を拒むに至らば、偶像教徒の一種たるを免れず。器械を以てするも、或は智識を以てするも、人の爲に制限せられたる神は、等しく是れ偶像の部類なり。故に吾等は豫め讀者諸君に望む、以下述べんとする所僅に一斑に過ぎざれば、其の全豹に關し

ては、諸君自ら會得されむことを。

### 第一節 自然界に於ける神の顯現

正午頃、二人の童兒が盛んに爭論するを、父親何事ぞと出て問へば、甲兒の曰く、太陽は今僕の頭の上にあるに、乙兒は己の頭の上にとて僕に抗辯するなり。請ふらくば公平なる父上の裁判をと。父親唯々と諾して、即ち甲兒の地點に到り、太陽を仰げば、正に頭上にあり、再び乙兒の地點に立ちて、太陽を仰げば、亦も彼の頭上にあり。愚なる父親は兩兒の勝敗を決するに苦しみたりき。

眼前に展開されたる自然界は、恰も兩兒が爭論の基となりたる太陽の如く、觀察者の立場次第にて、如何様にも解釋せられ、古來多くの爭論の因をなせり。而して神を信する我等より觀れば、自然界は神の智と徳

と方とを遺憾なきまでに現はせり吾等が自然界を通して神を知らんとするは衣服容貌舉動を通じて人の心を讀まんとするに等しく寧ろ當然の方法と謂ふべきか。

### 一 自然界の啓示

(一) 自然界の現象は大智大能大徳の神を現はす。諸々の天は神の榮光を顯はし蒼穹は其聖手の業を示す。此日語を彼日に傳へ、此夜智識を彼夜に送る。語らず言はず其聲聽こえざるに其響きは全地に普く、其言葉は地の極にまで及ぶ。(詩篇第十九)顯微鏡なく望遠鏡なく天體運行の法則など知る由なかりし未開の時代に自然界を觀て直覺したる希伯來詩人の信仰は永久不變の眞理なりかし。

雲無き秋の夜、屋外に出で、蒼空を仰げば、先づ眼に映るは古來幼年幼女の好伴侶たる十三七ツの御月様なり。優しげに冴えたる月は、屋根

に登らば手の届かんほどの近間にかゝれど、地球を隔つること二十五萬餘哩、即ち地球周圍の殆ど十倍なり。他の諸遊星に至りては其の百倍乃至五百倍以上を算するの多く、是等諸星地球も遊星の一なりは、太陽の周圍を回轉して、茲に一の太陽系を成す。而して是れ唯我太陽系に屬するものゝみ、眼を放ちて我太陽系以外に屬する恒星を眺むれば、肉眼に映する所の六等星まで一萬一千百八十三、望遠鏡の力を借りて十等星までを計算すれば、實に其の數二百三十萬を超ゆ。而かも是れ限定せられたる數にあらず、望遠鏡の發達に伴ひて年々歳々増加し行くものなり。是等恒星の或るものは我太陽に等しく、或るものは我太陽よりも大にして、其の周圍に多くの遊星を回轉せしめ、一種の太陽系を形成せりといへば、四方八面、何れの方向にも無數の太陽系ある譯なり。實に宇宙は空間的に無限大といふの外、形容の語なきを覺ゆ。

自然界が現状に達するまで幾億萬年を經過せるや詳ならねど、地質學其の他關係科學の發達は、學者をして我地球の戶籍調査を爲さしむるに至れり。さらば地球の出生年齢は明かにせられたりやといふに、未だしと答へざる可からず。英國のロールド・ケルピンは、地球の年齢を一億乃至二億年と算定せるが、一億乃至二億年といへば、疑問の範圍が一億年ある譯にて、不明といふも其の意義異ならず。地球出生後の年齢にして斯くの如くむば、出生以前、即ちラプラス以來眞ならむと想像されたる如く、星雲てふ瓦斯體の雲様のものより現在の太陽系が成れりとせば、星雲時期より地球發生に至るまで幾億萬年を經過せりや、星雲時期以前は如何、今後は如何、而かも是れ我太陽系のみのこと、無數の恒星の中には、老いて死期に近づけるもあれば、生れたる儘の嬰兒や、血氣壯んなる青年もありとのことなれば、宇宙は時間的に無限長なりと謂はざる可からず。

我等が棲息せる宇宙てふ邸宅は、年代に於ても、亦廣さに於ても、測定し難きほどなるを知らば、何となく住み荒されたる怪物屋敷に出會したる心地せざるに非ず。然れども、こは怪物屋敷にあらず、此の邸宅の隅より隅まで、整然たる秩序法則によりて支配されつゝ、あれば、我等は心を安くして生活すべきなり。見よ、動物、植物の互に相助けて生活する様は如何。水、空氣、其の他の礦物が動物、植物の生活に及ぼす影響如何。太陽と月と地球との關係如何。此の星と彼の星との關係如何。總て一絲亂れざる法則の支配の下に各、其の時所を得てあるなり。或は海王星、天王星の如く、變則なる運行を爲すもあり、或はハリー彗星其の他の如く、突如として現はれ、忽ちに飛び去るもあれど、是には是の法則あり、彼には彼の法則あるなり。而して其の原則に至りては、大は天體の運行より、小は

顯微鏡の助を得て辛うじて識別さるゝ程なる微分子に至るまで、一貫して動かす。ミルトンが林檎の落下するを見て、物體互に相引くてふ力、即ち引力を發見したる爲に、天文學の發達に大影響を及ぼしたるは、何故ぞや。一個の林檎も無数の星辰も、共通法則の支配下にあればならずや。即ち林檎に關しての眞理は、太陽に關しても亦眞理たればなり。

科學は自然界の現象を研究し、其の中に一貫せる法則を發見せんとするもの、科學の能事は、法則發見にて足るなり。而して哲學は、科學の到達點を起點となし、更に進むで現象の奥、法則の底に、本體を觀、精神を發見せんとするなり。科學者の所謂自然法を、吾等は拒む者にあらず、今一步進みて考へんとするのみ。

茲に一大邸宅あり、何時頃建てられたりや、廣さ幾里なりやを知らずと雖も、邸宅内の器具、器械の整頓より、奴婢、家畜の働きまで、一絲亂れざ

る法則に従へり。見る者一人として法則の巧妙嚴肅なるに驚歎せざるは無し。然れども、我等は法則よりも寧ろ立法者にして支配者なる其の邸宅の主人を偲ふなり。而して何れの家庭か、自然界の如く完備せりや。最も力に富み、徳高く、智識豊かなる人の家庭と雖も、器具器械の配列運用、各人の調和一致、其の他に於て、自然界ほど完きものありや。吾等は新たに訪問せる家の主人が不在なりとも、什器の整頓や、家族奴婢の應接振りに由りて、其の主人の性質を忖度するなり。完備せる自然界を通じて觀る所の主人は如何。大智大能大徳者にあらずや。多少科學的智識に觸れ、整然たる法則を自然界に發見したる吾等は、科學の何物なりや。法則の何なりや、を全く解せざりし所の希伯來詩人が、直覺せるに勝りたる意義を以て、諸々の天は神の榮光を顯はし、蒼穹は其聖手の業を示すと唱和せせまく思ふなり。誰か科學を反信仰的といふや。科學が科學に

止まらば、元よりそれ自身に於て信仰にはあらずと雖も、吾等は科學を段階となして信仰に進むを得。人の容貌、服裝、舉動が、其の精神を現はすべくば、自然界の現象を科學的に研究して、宇宙本體たる神を知らんとするは、寧ろ當然ならずや。科學を以て反信仰的となすは、之を終局となすの誤謬に由るのみ。

(二) 原因の觀念に大智大能大徳の神現はる。吾等は何時頃よりも無く因果律を信ず。結果あれば必ず原因ありと、而して原因と結果との量の關係をいへば、小結果には小原因、大結果には大原因あるべき譯にて、世に小原因が大結果を生み出すやに思はるゝは誤りなり。恐らく其の原因と思はるゝものは、僅に原因の一部に過ぎずして、他の多くの原因を看過せるならむ。一粒の種麥百粒を實れりとせよ、或は之を以て小原因が大結果を生み出せりと思ふ人もあらんかなれども、一粒の種

麥は原因の一部に過ぎざるなり。土地、日光、空氣、水分、肥料及び勞力など、百粒に相當する原因なくむば、百粒は生すべからず。即ち如何なる場合に於ても、原因は其の結果より小なるを得ざるなり。

因果律に従ひて現在の自然界を観察すれば、現在の自然界は、將來に對しては原因なるが、過去に對しては結果なり。現在の自然界は、存在を始めたる時期ありしや、或は永久に存在せしや、何れにするも、現在の儘にて存在せしには非ざるべく、何等かの原因ありて、現在の結果を生み出すに至りしことを否認する者はあらず。さらば其の原因は何物なりしか。進化論者は曰く、最初極めて單純なる物質が太陽となり、月となり、地球となり、其の他の遊星となり、地球の熱度降下して生物の棲息に適する時期に至りて、最下等なる生物發生し、漸次進みて高等植物、高等動物となり、斯くて現在の自然界の現出を見るに至れりと。彼等に従へば、

現在の自然界は、極めて單純なる物質の進歩發展して成りたるにて、現在自然界の原因は、極めて單純なる物質なり、自然界の變化は、一面に於て常に同一過程を繰返すが如きも、他面に於て常に進歩發展しつゝあり。自然界の變化を巡環と觀ずして進化と認むる點は、吾等亦進化論者に同じ。

然れども、單純、不規則、無秩序、無生命なる物質が、盲動し行く中に、複雑となり、規則を生じ、秩序整ひ、而して遂に生命を發揮せりとせば、是れ則ち小原因が大結果を生せりとなすものにて、吾等が承引し難き所なり。單純なる物質が、現在の自然界とまで進むには、それに相當すべき原因なくて叶ふべきか。一粒の種子が、芽を出し、葉を生じ、花を着け、遂に百粒の果を結ぶを觀て、其の原因を單に一粒の種子に求むるは思はざるの甚しきなり。生物の進化せるは、自身の力にも由るべけれど、亦周圍の境

遇に適せるが爲なり。既に周圍の境遇といへば、彼生物以外を指すものならずや。生物進化に外部の力の關係ありとせば、單純なる物質が進化して、現今の自然界となりたる原因を、單り物質それ自身に歸せんとするの非なるは、多言を要せずして明かなり。況んや原始物質の由來に關しても、他の原因無かるべからざるをや。

さらば其の原因は何ぞや。彼は宇宙に存在を與ふるものなれば、自ら永久の存在たるべし。彼は宇宙に生命を與ふるものなれば、自ら永久に生ける存在たるべし。彼は宇宙に秩序規則を與へ、之を統一するものなれば、自ら大智大能者たるべし。彼は宇宙に調和を與へ、相倚り相助けしむるものなれば、自ら大徳者たるべきなり。而して單り靈を以てのみ解釋せられ、甚だしく靈的色彩を帯びたる此の宇宙の原因は、靈的存在たらざるべからず。是に於てか吾等は宇宙の大原因をば、永久に生ける靈

的存在にして、大智大能大德者たる神と信するなり。

此の信仰は、進化論の敵にあらず。寧ろ進化論てふ盲者は、此の信仰に由りて力ある手引を得たるものといふべし。偶發偶中の不満足は、唯此の信仰に由りてのみ醫せらるべければなり。

(三) 目的の觀念は、唯一の大智大能大德の神を現はす。現在の自然界を觀察すれば、事物相互の間に巧妙なる配合の存在するを看過し能はず。試みに魚類を解剖して肺臓を捜し見よ。吾等と等しく呼吸して生存するものにして、何故肺に肺臓なきかに驚かむ。魚類は呼吸すれども、肺臓を有せずして鰓を備ふ。水中呼吸に肺臓は適せざればなり。陸上動物は、鰓の代りに肺臓を具ふ。鰓は水中に適するも、空氣中には全然不適當なればなり。其他聴官の構造と音聲との關係、視官の構造と色形との關係を思へば、巧みにも配合されしものかなと驚かざるを得ざるなり。

り。大工が家を建つるを見るに、先づ數本の木材を削りて、柱又は桁の形を作り、或は穴を穿ち、或は兩端を細くす。我等は初め何の故なるを知らずと雖も、構造成りて後、此の穴と彼の桁と巧みに配合せるを見て驚歎を禁じ能はざるを常とす。然れども、自然界に於ける配合の巧妙なるは、此の如きにあらざるなり。小は各原素の關係より、大は天體相互の關係に至るまで、一として孤立し獨立せるは無く、互に關係し、巧みに配合せられたり。若し一の太陽存在せずば、我地球は生命の維持は元より、位置の安全さへも保ち難かるべく、隣國の動搖が我國に影響する如く、隣世界の變化は、我地球に影響せざるを得ざるなり。

配合は目的の存在を意味す。肺臓と空氣との配合は、生活てふ目的を遂げん爲なり。夫婦親子の配合は、一家の幸福を増進せん爲なり。而して之を一國家に觀るに、各人各個の配合は、總て國家の目的を成さんとし

つゝあるを意味し、太陽と月と地球と又彼の星と此の星との配合は、宇宙に唯一目的あるを示せるなり。宇宙の統一なきが如くして統一ある、紛然雜然たるが如くして整然たる、之を一軍に譬へつべきか。軍の中に數個の師團あり、師團は或る範圍の内に各、獨立の行動を取る。師團の中には歩兵を主とし、騎砲工輜重などの特科兵あり、或は合し或は分れて、諸種の野戦隊を編制す。各個隊の爲す所必ずしも同一ならず、或は右へ向ふあり、或は左に走るあり、高く築くあるかと見れば、深く掘るもあり、小銃大砲を以て敵を狙撃するもあれば、傷者を運搬するもあり、或は計算し、或は炊爨するなど、千差萬別、門外漢の眼にては、那邊に統一ありや容易に發見する能はざる程なれども、而かも彼等は唯一の目的を以て事に従ひつゝあるなり。彼等の行動に價值ありや否を知らんとせば、此の唯一目的を標準とし、之に關聯して判斷するにあらずむば、單獨の行

動は無意義に了るべし。而して軍に一貫したる目的あるは、其の統轄者たる軍司令官あるに由る。司令官の強弱能不能は、直ちに軍の強弱能不能を結果す。我等は軍の行動を觀察して、軍司令官の人物を忖度せんとするなり。宇宙は一面雜多なり、混亂紛雜の状態、軍の比ひにあらず。宇宙の他面は唯一なり、統一調和の様、亦軍と同日の談にあらず。總ては調和配合せられ、一貫せる目的に向つて進みつゝあるなり。抑、司令官たる統一者は如何なるもの乎。

萬卒は得易く、一將は求め難し、とは統轄の難事たるを表白せるなり。將に旅團に長たるあり、師團に長たるあり、又軍に長たるあり、範圍の擴張さるゝに従ひて、事は益、困難を加ふ。或は中隊を手足の如く指揮すべけんも、大隊に至れば容易ならず、或は大隊を手足の如く指揮すべけんも、聯隊、旅團となれば容易ならず。聯隊、旅團は量の大なるのみにて、等し



く歩兵を主とするものなれば、質は單純なれど、師團となり軍となれば、量に大を加へ、質に複雑を増すを以て、之を指揮統轄するは容易にあらず。事實を言へば、今日長官の精神が渺たる一兵卒の生命となり、長官の意思が一絲亂れざる規律となるが如きは、聯隊、大隊に見出し難きのみならず、中隊に於ても稀有と謂はざるべからず。中隊は愚か五人生活の一家庭にても甚だ多しといふべからざるなり。然るに、無限大無限長なる自然界を觀れば、萬物は巧妙なる配合によりて統一せられ、森羅萬象は一貫せる目的に向つて并進し、敢て悖るもの無く、天體の大より塵芥の小に至るまで、統轄者の精神は盈ち渡れり。大智大能大德者たる唯一の神を信する吾等は、之を觀て益、信仰を固うするなり。

科學を以て萬能終局とする學者が、吾等の信仰を迷妄と嘲るは無理なき次第なり。彼等は目的の存在を否認して曰ふ、終局目的の爲に配合

は生じたるに非ず、長き生存の爲の努力(所謂生存競争)は、外部の境遇に應じて新らしき必要を生じ、必要上より水中動物が陸上生活を營むに至れば、鰓は變形して肺臓となれるなり。而して其の變化の力は、外部より來らずして内部より發生す。是の故に終局目的が配合を生じたるに非ざるなりと。こは科學として或は正當なる議論なるべし。而かも必要あればとて何等の力加はるなく、自然に進化し變化するとは受取り難き話ならずや。一粒の種子が、必要あればとて、外部の力を待たずして百粒の果を結び得べき乎。元より目的の存在は、議論一點張りにて理解し難きも、今日科學の提供せる結論に此の信仰を繋ぐとも、竹に木をつぎたる様のものならず、寧ろ未成の晝に瞳を加へたるが如からずや。特に進化論の示す如く、單純なる無機物が、漸次複雑となり、益、進みて生物を生じ、人を産み、物質的進化は心靈的進歩に繼續されたりとせば、雜然な

る萬物の中に一貫せる進化の徑路を發見す、而して是れ應て目的を現はすなり。

之を我等が日常の行動に觀るも、門外一步を踏み出すに先ちて到着點を定む。行動としては最後に現はるべき目的を腦中には最初に畫く。人は一事を始むるに當りて、先づ成功を心に決す。觀察の方法が單に生理的に止まらば、人の行動にも目的は發見せられざれど、實際に於て人の一舉一動は、目的の觀念に支配さる。此の如く有目的者を含む所の宇宙に目的なしとならば、人は宇宙の畸形兒か。若し人と宇宙と全然別種の基礎に立たば、總ての科學の成立せざるにあらずや。

自然界は眼前に展開されたる書翰なり、而かも是れ書翰にして説明者に非ず。之に對する者の心得次第にて、或は深き意義を示し、或は白紙

の如く無意義と化す。巧みに書かれたる親書も、受けたる者が色盲ならんには形體をも辨別すまじく、文字なき者ならば、形體を辨ふるも意義を解するまじく、友情無き者ならば、折角の友情をも理解せずして了るべきなり。吾等は送主に對する信仰を以て此の書翰を読み、彼が智能愛の本體なる神てふことを覺る。而かも之に對して反對の餘地無きにはあらず、枉げて反對せんとせば、幾程も反對せらるべし。信仰のことは壓迫されて信すべき筋のものにあらず、進んで受くべきものなり。智識に關するよりは、寧ろ多く徳義に關するなり。自ら好んで親の恩義を無視する人に、如何で孝道の解せらるべきぞ、同様に、好んで神恩を拒まむ人には、本書の如き、鳴る鐘かねや響く鉄かねの如くならんのみ。

## 二 傳説の暗示

(一) 創造説は傳説なり。舊約全書の開卷劈頭の創世記には、太初はじりに

神天地を造り給へり。に筆を起し、大洋を造り、各種植物を造り、動物を造り、而して最後に人類の始祖を造れりと記されたり。こは歴史的事實の記載なりやといふに、天地未だ成らず、人未だ生せず、元より數千萬年後ならでは、文字の使用法は解せられざりしなるに、誰が目撃し、何を以て記したるぞや。吾等は之を事實の記載と信じ能はざるなり。

さらば人智漸く進みたる後、時代智識相應に研究せられたる結果を記されたるものなりやといふに、元より人智の限りを盡されたるには相違無かるべきも、創世的内容の如きは、研究の上にて、手に取る様に知らるべき筋のものにあらず。

記者が一種宗教的信念を以て此の書を著はしたる痕跡は、漫然讀過する者も、尙は見逃し能はざる事實なり。宗教的信念の高潮に達したる場合、即ち所謂インスピレーションを得たる場合など、常識を以て辨へ

難き靈界の事を辨識するは、今日吾等と雖も、多少經驗する所なれば、創世記の著者も亦、インスピレーションに打たれて本書を書きしものと観るは適當ならん乎。然れども、人の意識〇全く消えて、神の力之に代り、筆者が恍惚として我を忘れたりし間に、本書は成りしかといふに、然るにしては此の記事は餘りに人間臭き様なり。

インスピレーションも得しならむ、人力の限りをも盡せしならむ、而かも要するに、當時一般に信せられたる傳説を記述し、又編輯せしものと吾等は信するなり。

(二) 傳説の由來。普通に創世記はイスラエルの建國者モウセが記する所と信せらる。好しやモウセが自ら筆を取りたるにせよ、己が名をもて他の人に書かせたるにせよ、何れにせよ、記者は創作者にあらず、一般に信せられたるまゝを記述し、又は彼の地、此の地、甲家乙人によりて

傳へられたる傳説を編纂せるものなるべきか。而して此の種の傳説は、單り猶太國のみならず、アッシリア、バビロニア、其の他の國々の傳説中にも之に類似せるもの少からず。我日本の開闢説にも、一面猶太説に酷似せるものあり。されば創世記の創造説は、猶太國特有とも斷じ難き節なきに非ず。然れども、他に類似せるもの多く、猶太國特有の傳説ならねばとて、創世記の價值は減すべきに非ず、却つて廣きに従ひ、多きに伴ひ、其の價值は高まるべきなり。楠正成唯一人、演壇に立ちて南朝正統論を呼號したるが故に、其の議論は貴く、新田や北畠などが之に賛成し、輿論が之に同じたるが爲に、所論の價值が下落するとなすの不條理なるは、必ずしも識者を俟つて知るほどのことにあらざるなり。

宇宙神造の傳説は、猶太國のみならず、他の國々にも傳へられたり。せば、各國別種に其の傳説の起原を有するや、一に起りて他に傳はりた

るやは詳ならずと雖も、兎に角、餘程古き時代より、誰が言ひ出せしといふにあらで、殆ど自然的に信せられたるものなるべし。されば此の傳説は、文字生じて後發生したるにあらず、元より創世記を以て初まりたるにあらず、恐らくは言語の發達と其の由來を等しうせんか。

(三) 傳説の批判。創世記の傳説は、一般傳説と等しく、外形上より見れば、比喩の如くまた謎の如し。固より文字通りに信せらるべきにあらず。然れども、各國共通ともいはるべき此の傳説に、何等の暗示をも發見せざるは、恰も是れ黒色せる鑽石に多量の黄金を含めるを知らざるに似たらずや。實に傳説は鑽石なり。之より土を除き石を去り鉛を分ち銀を取れ、さらば光輝燦然たる黄金を得べし。創造説中の形式は、或は凡て雜糞たるべし。而かも神と宇宙との關係——神は創造主にして、宇宙は受造物との關係——に至りては、永久に光輝を失はざる黄金なり。

或は曰ふ、創世記に記されたる萬物創造の順序は、略ぼ進化論者の所説に符合せり。是れ創世記の信せらるべき所なりと。創造説は或る時代の科學に反し、或る時代の科學に合せり。然れども、科學に反するが爲に其の價値を減せず、合するが爲に重きを加へざるなり。傳説はどこまでも傳説にして、科學にはあらず。言語の奥にまた文字の裏に、深き意義の潜めるあるを觀取すれば、足りぬべきか。傳説中の深き意義とは、神は天地萬物の創造者たりてふこと、是れなり。

自然界に神の顯現を觀むとするには、先づ神と自然界と深き關係あるを前提とせざるべからず。若し二者の關係皆無ならんか。自然界を如何に深く研究するとも、吾等は毫も神に關して得る所無けむ。神は宇宙の創造者にして、宇宙は其の受造物ならむか。自然界は神らしき面影を有すべく、神の精神は茲に現はれてあるべければ、吾等は自然界を觀察

して神の御心を偲ぶを得べきなり。

天地創造の事實を明かに目撃し記憶する者としては無かるべきも、人は本能的に之を感得し、何時とは無く、傳説となりたるにはあらざるか。故に其の形式には幾多の誤見謬解を含むに拘はらず、根本に於て牢として抜く可からざる眞理あるにあらざるなきか。吾等は創世記の傳説に於て學びたる神を信ず。而して此の信仰を基礎となして、他の研究をなさんとす。哲學者、神學者の名著、或は廢棄すべし、吾等の中に彼等に匹敵すべき學者出で、其の缺陷を補ふやも知るべからざればなり。然れども、貴き創造の傳説に至りては、新造物をもて代ふべからざれば、吾等は之を學者の卓説に勝りて貴ぶなり。

## 第二節 人生に於ける神の顯現

前にも言へるが如く、自然界は神の顯現に關して單に書翰たるのみ、讀者を待ち始めて意義を傳ふるなり。書翰とはいへ、字義文體に於て不明瞭なるものあり、屢誤られて無意味の土塊と認めらる。然るに、茲に書翰たると共に、讀者を兼ねたるものこそ現はれたれ。人生は即ちそれ。人生に於ける神の顯現は、自然界に於けるそれに比して明確なり、況んや人生は自ら讀者たるをや。人生は、之を客觀的に考察するも、明かに神の智能及び徳を偲ばしむるものあるに加へて主觀界を有す。人は外界を觀、他人を客觀するまでも無く、自ら内省して、己が靈性の鏡面に神の面影の映れるを發見すべきなり。

人生が自然界の一部たり、其の本體の代表者たることに關しては、何人と雖も、異存無かるべきが、如何なる程度に於て代表者たるべきや。片鱗の大魚に於ける如き乎。片鱗も大魚の一部たるに相違なし、故に片鱗

も、以て大魚の性質を知るに足るてふことは稀有にあらず。然れども片鱗を看るに先ちて、豫め大魚の性質を知るにあらざれば、片鱗を以て大魚を察するは難し。曾て魚類を目撃せしこと無き者が、鯛の鱗を數十百手に取りて研究するとも、恐らくは得る所無からむ。鱗には呼吸器、消化器を具へざるなり。浮袋を備へざるなり。其の形體に於ても、鱗は魚類と相似ざるなり。片鱗が大魚の性質を示すこと極めて不完全なりと謂はざるべからず。之に反して、滴水が大洋の性質を現はすは殆ど完全なり。砥石の如き水面に大船巨舶を浮べ、逆巻く怒濤に荒涼じき勢力を示すが如きは、掌上の滴水を以て解せらるべきに非ずと雖も、性質に於ては即ち二に非ず。滴水の性質それ自身大洋の性質たり。

人が宇宙本體を現はすことは、片鱗が大魚の性質を示すが如く、爾く不完全なるものに非じ。而かも滴水が大洋の性質を示す如く完全なる

を得るやば疑はしけれども、寧ろ之に近きものあらん乎。宇宙の冠冕萬物の首腦を以て任ずる人は、客觀的に於ても亦内省するも、宇宙本體の何なるかを能く現はせり。

#### 一 人生の啓示

(二) 智識。宇宙の本體は智識的なりや否や、自然界は能く其の智識を啓示せりや否や。そは暫く措くとするも、茲に自然界の一部に人類あり、自然界の現象を研究して其の原則を理解せんとす。而して是れまでの経過に由りて察するに、人は自然界を解釋するに於て可能力を有す、人類が自然界を解釋し得ると承認する以上は、既に左の三件を認めたるなり。即ち

第一。人は自然界と共通の原則に由りて支配されたること。若し人は甲の原則に従ひ、自然界は乙の原則に従ひ、二者相通するもの無か

らむ乎。爭で一が他を解するを得むや。人が自然界を理解する以上は、互に共通の原則に支配され居らざる可からざるなり。

第二。人は智識的存在なること。自然界と人と共通原則の支配を受くるのみにては、人は自然界を解釋すべからず。解釋は智識の働きたり、智識的存在にして、始めて事物を解釋し得るなり。されば、自然界と人とは共通原則の下にあるのみならず、人は本性に於て智識的存在たらざるべからず。こは既に「人觀」の章に述べたる所なり。

第三。宇宙本體亦智識的存在なること。吾等は人が自然界を解釋する以上は、二者の間に共通原則の働きあるべきを學びたり。而して尙ほ人は其の本性に於て智識的存在たるべきを知れり。人は唯一の道理を以て一貫せられたる合理的存在なりとすれば、之と共通の原則の下にある自然界も亦、合理的存在たらざるべからず。人のみが合理性を有

し、自然界は非合理性を有すとせよ、一切の科學は成立すべからざるなり、合理的存在が解釋し得る自然界は、等しく合理的存在にして、宇宙本體は大智者たるべきを知るべし。

夫れ、宇宙は大なる個人にして、人は小なる宇宙なり、彼此相通じ相似るものありとすれば、吾等が内省に由りて意識する所の精神を、大なる個人たる宇宙に求め、而して宇宙精神を以て吾等のそれに勝る大智識と信ずるは、寧ろ至當ならずや。

(二) 道德心。人は單に合理的存在なるに止まらず、また道德的存在なり、君臣親子夫婦兄弟及び朋友の間に現はれたる、古來の美談を見るまでも無く、吾等は内省に由りて、自ら正義を喜び不義を惡むの性あるを知る。吾等は自ら道德的存在たるを意識すれば、之を以て他を類推して、他も亦吾等と等しく、道德的存在たるべきを信じ、斯くて全人類を道

德的存在となすも、附會の獨斷ならざるを知る。

自然界は、人と共通の原則の上に立つ、而して人は智識的存在たるのみならず、亦道德的なりとせば、自然界も亦根本に於て道德的にあらざらんや、好しや直接に宇宙本體が道德的存在なりや否を知らずとも、其の一部に道德的なる人類ありとせば、之を包括せる全部なる宇宙本體を道德的と信ずるは當然ならずや、宇宙本體なる神は、智識的存在たるのみならず、亦道德的存在なり、此の信仰を基礎として、始めて人類の道德性は解せらるべし、吾等は正義を喜び不義を恥づることによりて、自己の道德性を覺ると雖も、神の道德性を信ずるに至らざる限りは、未だ以て基礎ある自覺と謂ふべからず。

神は空の月、吾等の良心はそを宿する水鏡なり、吾等が正義を喜び不義を惡む心の中、殊に不孝の兒に泣く父、病兒を介抱する母の心に、いみ



じうも神の慈愛は映うつされたり、自ら神に遠しと思ふ人よ、君は内外の誘惑に勝ちて所信を斷行し、正義を貫徹したる際に於て、心中に賞讃の聲の禁じ難きを覺えずや、人知れぬ不義を悲しみ、責罰の念の堪へ難きを感せずや、さらば君は神より遠からざるなり、賞讃責罰の念は、之を神の聲、少くとも神の聲の反響と觀るは當を得たらむか、人の道德性に映うつれる神は、道德的存在にして、仁愛窮まりなきが如し、是れ吾等の信仰なり、

(三) 宗教心。人は人間相互間の親愛を以て満足する能はず、超人即ち神に接するに及び、初めて饑渴を醫す、人は人間相互間相倚り相助くるを以て満足する能はず、超人即ち神に信頼するに及び、始めて慰安を得るなり、吾等が既に第一章の「人觀」の部に於て述べたる如く、人は本來宗教心を有し、對手が何物なりや明かならざる中に、畏敬、憧憬、信頼、願望及び服従心の傾向あるを示す、されば、神は畏敬を受くべきほどに權威

あり、憧憬さるべきほどに慕はしく、信頼、願望、服従に値ひすべきほどに人類を保護愛育し、其の正しき願望を許すなど、互に交通を爲し得べき存在なるべし。

吾等は曩に自然界に於ける巧妙なる配合に就いて學ぶ所ありき、自然界は眼あるも之に應ずべき光線を缺き、耳あるも音響無く、また肺臟あるも之に配すべき空氣無きが如き、不完全不正直なるものにあらず、若し然らんに、吾等は自然界の中に智識と道德とを發見すべからざるなり、吾等が信する所に據れば、自然界は智識に富み、又正直にして我を欺かず、而して總ての有形界の現象は、靈界の眞理を現はすものなれば、完全なる配合は、心靈界に於ても亦眞理なり、即ち我等の心に畏敬、憧憬、信頼、願望及び服従心あるは、神は之に應ずるほどに、智と愛と能ちからとに満てるものなるを現はせるにあらずや。

智識の程度低き時代に在りては、宗教心は只管に乳を慕ひて泣く嬰兒心に等しく、屢母ならぬ乳母を誤りて母と信じ、ある限りの誠實を盡したりき。或は慈母の懷に抱かれて平安なる眠りを食りながら、其の理由を解せざりき。母と我との間に如何なる關係の結ばれたれば、斯くばかり我は母を慕ふぞや。嬰兒の能く理解する所に非ざるなり。好しや其の理由を解せず、また屢誤らるゝことはありとも、而かも母を慕ふ嬰兒心は、美はしき本性の發露せるなり。むづかりて泣くは嬰兒の孝行なり。やがて成長しては、恩義を解し、貴き義務を覺るべきも、未だ東西の差別だに辨へざる嬰兒は、泣くが其の日の課業なり。幼稚なる宗教は、正に此の如きか。人は何が故に信するや、其の理由を解せず、往々にして迷信の捕虜となり、我家の傭人たる乳母を眞實の母と誤り、眞に愛すべき慈母あるを忘るゝ如く、神を忘れて神ならぬものを神として拜すること珍

らしからずと雖も、而かも宗教心は本性の發揮せるにて、大智大能大徳の神在す反應として、我等の心に起りたるにあらずや。

## 二 傳説の暗示

(一) 神人近似。創世記の傳説は、神が天地萬物を創造し、最後に、人を己に似せて創造せりと傳ふ。こは荒唐無稽の傳説なりやといふに、決して然らず。吾等が屢に自然界を通じて神を學びたるは、自然界は受造物神は創造者てふ二者の關係ありて、自然界が神の面影を留めたるに由るなり。神と自然界と何等の關係なくば、如何に深く研究するとも、自然界の現象中に神の聖旨を發見す可らざるなり。吾等は今人生に顯現せる神に就いて學びたり。人生と神と密接なる關係あるを前提としたるに由る。神は創造者にして、人は受造物たるも、亦兩者の關係なり。而かもこは自然界と神との關係に勝る所なし。斯からむには、人を自然界より

分ちて研究する必要無かりしなり。自然界は沈黙せる書翰にして、人は書翰たると共に、亦讀者たり、説明者たり。人は客観主觀の兩界に住むが故に、外部的觀察に由るの外、内省して神を思ふ、されば單に造られたるのみならず、神に似せて造られたりとあるも、道理なしとせざるなり。

然れども、似せてといふは甚だ明瞭を缺く。如何様に似せたりや、鼻が縦に坐るも、口が横に裂けたるも、亦神に似て然るにや、吾等は前に人は肉體の上より觀れば、全く自然界の一部にして殆ど寸毫も類を他動物と異にせず、唯人の最も卓越せるは靈的方面にあり、と述べたるやに覺ゆ。されば、似せてとは肉體をいふにあらで、靈的方面を指せるなり。智情意を一個人格中に統一せる、智識的、道德的にして亦宗教的なる、永久不死なる點など、神に似せて造られたるならんか。

(二) 此の傳説の批判。エチオピア人の信仰せる神は、黒色の像なり

き。印度人は印度人らしき神を崇め、亞弗利加人は亞弗利加人らしき神を祀るなど、神人同形は野蠻時代に於ける信仰なりき。其の迷信たるは言ふまでも無けれど、宗教が成立する限りは、神と人とは交通不可能なる程に別質のものにてはあるまじ。同形と觀るは極端なるを免れずと雖も、近似する所なくむば、兩者の交通より成立する宗教は、世に存在すべからざるなり。されば、神が己に似せて人の靈性を造れりと爲すは、誠に餘儀なき次第なり。斯くて考ふる外に何とも信じやうなきを如何にせむや。

此の如き傳説が古より傳はり來れるは、好しや何等の證據にならずとも、大なる暗示を與ふるものなり。自ら省みて我裏に神の面影を觀るてふ事實も亦、其の傳説に符合す。然れども、我等の缺點短所を神に負はしむべからず。觀察の順序よりすれば、人を通して神を觀ること故、人は

始にして神は終りなるが如きも、本來神が人に似たるにあらで、人が神に似たるなり。神は本位にして、人は從位にあり。神は源泉にして、人は下流なり。此の如き場合にありては、曲れるを直にし、濁れるを澄まし、足らざるを補ひ、吾等の性格が完全に近づくに従ひて、漸く神に似通ふものなり。慎しみて濁れる下流を以て清き源泉を推す勿れ。

吾等は茲に人生を通して神を學びたり。人が智識的に神の業を理解せんとする奮闘は、所謂科學に由りて發揮されたり。人と人との關係に於て神に從はんとする苦心は、道德行爲に現はれたり。柔順なる子供心もて抱合一致せんとする盡力は、諸種の宗教に由りて其の一端を實現せり。是等の事實は、皆神己に似せて人を造れりてふ傳説に奥書證明せるものならずばあらず。

### 第三節 耶蘇基督に於ける神の顯現

人生は自然界の一部なれば、人生に於ける神の顯現は、自然界に於けるの一部たるは言ふまでも無けれど、人生は自然界の中に於て著しき特色を發揮したるが故に、神の顯現を學ぶに就いても、之を自然界と區別するの便宜なるを覺えたり。同様に、耶蘇基督に於ける神の顯現は、人生に於けるの一部なれども、顯現の程度、種別の差の著るしき、之を特別に學ぶの必要を感せしめたり。

耶蘇は歴史上の一人格なり。歴史上の系統や時代思潮に何等の關係なく、突如として天空より舞ひ降りたる者に非ず。されば一概に耶蘇に於ける神の顯現といへど、之が前をなせるあり、之が後をなせるあり。イヌラエル民族は之が前をなして、彼の爲に準備となり、基督者は之が後

をなして、彼の爲に繼承者となれり。されば耶蘇に於ける神の顯現を了解せんには、勢ひ前後二者を併せて考察するの必要あり。乃ち先づイスラエル民族に於ける啓示の發展に就いて述べんとする所以。

#### 一 イスラエル民族に於ける啓示の發展

茲に啓示の發展といふは、神の進歩の意義に非ず。吾等が信する所に依れば、神は本來完全なり、完全なるが故に進歩發展すべからず。然れども、人が神を識り之を信する程度は、年と共に進歩するなり。啓示の發展とは之をいふ。例せば、小學生徒の眼には、有名なる大家の畫も其の眞價は識別せられざるが、漸次年長け畫心の進むに伴ひ、畫の價値は認識さるゝに至る。此の場合に於て、畫は依然として元の儘なれど、觀る者の鑑識が進みたるを以て、畫の價値は益現はれるなり。啓示の發展も亦此の如き類か。

啓示の發展は、各個人に於ても認めらるべく、何れの國民に於ても亦認めらる。吾等は我國の歴史上に於て、道念の進歩、宗教意識の發達に伴ひ、多少神の顯現の發展せるあるを認め、而かも好んで吾等より見れば、古代の外國なるイスラエル民族に於ける啓示の發展を擧げんとするは、何故ぞや。第一、是れ格好なる適例なればなり。何國の歴史にも啓示の發展は認めらるべきも、イスラエル民族に於けるほどに明確なる適例は極めて稀なり。彼の國民の歴史は、宗教發展の教科書とも思はるゝ程なり。吾等は類ひ少なき好例として、彼の民族史に學ぶなり。第二、基督教に直接の關係あるに由る。何れの國民、何れの個人も、宗教意識の發達は基督教の爲めに準備となれり。然れども、多くは間接準備なり。單りイスラエル民族に於ける啓示の發展は、基督教の爲めに直接準備となれり。第三、宗教史とも見らるべき傳説の保存せられし爲に、研究に便なるに

由る啓示の發展は何國の歴史に於ても多少之を見るべきも、數多き古記録古文書の中に、一貫せる發展の金線を發見するは容易にあらず。然るにイスラエル民族の傳記は、態々啓示の發展を示すために書かれたるにはあらずやと思はるゝほどのもの、集めて舊約全書にあり。以上の三理由は、吾等をしてイスラエル民族に於ける啓示の發展を學ぶの便なるを感せしめたるなり。

(二) 個人の守護神より一家の守護神。イスラエル民族は、元スリヤの中に於て牧畜を家業とせる民なりき。彼等の先祖をアブラハムといふ傳説に由れば、紀元前二千年頃、アブラハムは住み慣れたりし故郷のハランを出で、カナン邊りに移住せり。さなきだに宗教心篤かりし彼は、天涯萬里の孤客となり、轉た人生の寂寞を感ずると共に、神に信頼するの情益切實なるを覺えたり。偶像教徒の中に生れて、多年之に仕へし者

が、如何にして偶像ならぬ靈の神を信するに至りしや。彼れアブラハムの天才の發揮せるに由るか、抑、亦不可思議なる神の啓示を受けたるに由るか。吾等想ふに、恐らくば彼は偶像を携へざりしなり。而して他の人が偶像を拜すると略相似たる心持にて、今日所謂遙拜といふ様にて彼の神を拜せしならむ。端なくも之が宗教上の一大發見となりたるは、恰も地中に埋まりたる一線の截斷せるに心付か、で、遲滯なく通信せることが因となりて、二線を必要とせる電信が、唯一線にて足るを知りたるに似たり。

アブラハムは篤信家なりき。働くにも眠るにも彼は神と共にありき。古來傳へて彼を以て信仰の祖となすも、亦理由無きにあらざるべきか。然れども、彼の信仰は甚だ幼稚なるを免れず。彼が崇敬したる神は、彼一個人の守護神たるに過ぎざりしなり。彼の家稍富み、息イサクの爲に婦

を娶らんとて遣はされたる下人が、我主人アブラハムの神云々と言へるに見るも、彼の神は單に彼の神たるに止まりしなり。而して彼の家族繁殖するに伴ひて、彼の神は亦子の神、孫の神となりぬ。斯くてアブラハム家の神は、イスラエル種族の神となりぬ。其の信仰の初に當りては、裏庭に稻荷社を安置し、或は床の間に大神宮を祭り、家内安全延命息災を祈願すると殆ど選ぶ所なかりしなり。

無形の神を信じたるは、宗教上新時期を畫したるにて、驚くべき進歩には相違なきも、煽の中や風の音に、神の姿を拜し、其の聲を聴きたるを思へば、拜物教を隔ること未だ必ずしも遠からざりしなり。我國にて太陽を拜し、山神水神を信ずると同日の談にあらずと雖も、亦頗る相似たるものありしやに思はる。

一般にアブラハムは、一神教の祖と認めらるゝと雖も、彼の一神教は

甚だ薄弱なるものなりき。彼は彼の神及び彼の一族の神エホバを崇信するも、他の神を否認せるに非ず。彼の神が單に彼の神たるに止まらず、萬國萬民萬代の神ならば、彼の一神教は純に近きも、然らざる限りは、多くの他國の神を認めたるなり。

要するに、今日より觀れば、古代の信仰は極めて幼稚なりき。吾等は一にも辯護二にも辯護と、辯護に勞するの必要なし。唯有體に研究して、斯くの如き粗造なる人心の鏡面に映りし神の姿が、漸次明かに成り行く様を見て、興味を禁じ難きを覺ゆるなり。

(二) 國民の守護神。アブラハム以後年經つ儘に、イスラエル人は、漸次繁殖せしが、牧畜の民の習慣に従ひ、水と草との多き地を選びて、南方へ南方へと進みしほどに、何時しか彼等は埃及國に侵入しぬ。當時埃及の文明は世界に冠たる有様なりしかば、野蠻蒙昧なるイスラエル民族

は埃及人の壓迫を免れざりき。さしもアブラハムの後裔として自負心強がりし民族も、世の變遷には敵し兼ね、遂に埃及人の奴隸と成り下り、意氣頓に銷沈し、あはやエホバ神愛顧の民たる特權は、茲に粉碎されんず有様となりぬ。偉人モウセが奮然として蹶起したるは此の時なりき。時はアブラハムを隔つること殆ど七百年、モウセは同胞の現状を見て憤慨措く能はず、埃及人の桎梏より彼等を救ひ出して故國に歸り、久しく渴したりける自由を樂しましめんとせり。而かも實行には障礙の伴ふなきは稀なり。モウセの壯舉には内外に故障を生ぜり。埃及國王始め、人民の反對は元より覺悟の上なりしならむも、思ひ掛け無かりしは内部よりの反抗なりき。多數のイスラエル人は、奴隸の狀態にありながら現状に満足したりき。數百年の因習によりて、本然の自由心は消磨せられて、其の面影を留めざるに至りしなりき。さればモウセが自由の爲

にせる努力も、彼等に取りては徒事の様に誤られ、甚だしきはモウセが彼等を救はんとする骨折をば曲解して、殺さんとするものとなすに至れり。是れ意外なる反對なりき。而かも彼は、難に遭ひて屈する如き者にあらざりき。彼は萬難を排して、遂にイスラエル民族を率ゐて埃及國より逃れ出でぬ。彼をして此の一大壯舉を遂行せしめたる原因如何と問はば、彼の性格偉大にして、堪へ難きに堪ふるてふ英雄の素質を有せるは、其の一なり。愛民の情切にして、自由を慕ふ心の盛んなりしは、其の二なり。而かも彼が民族の守護神エホバを崇信するの念強く、イスラエルの神は、必ず我をして其の民を救はしめんとすの信仰甚大なるにあらずんば、如何に彼壯舉を企圖し遂行するを得むや。傳説の記する如く、彼の行動は宗教心の發動なりき。彼は神の旨を受けて、濟民の大事を企てしなり。幾度か挫折せんとせし時、彼を勵ましたるは實に彼の信仰なりき。



彼が信せし所に據れば、エホバ神はイスラエル人の王なり。多數國民の中にて特に彼等を選びて其の王となれり。されば神は決して其の民を棄つるものにあらず。モウセが極力同胞に説きたるは「我等には同族の神エホバあり。爾等彼に信頼せば必ず救はるべし。我は彼より遣はされたる救済者なるぞ」といふにありき。同胞の心を和らげたる、埃及の王以下を説伏せる、また途中に於て幾度か敵難を免れたるなど、總てエホバ神の祐助に由ると信せられたりき。モウセは、イスラエルの建國者なりしも、自ら王を以て居らず、エホバ神を以て王とせり。モウセは立法者なりき。日常生活の規矩より、宗教上の儀式に至るまで、細大漏らさざる律法を作り、民をして據る所を知らしめたりき。而かも彼が信じたる所に依れば、立法者は彼にあらずしてエホバ神なりき。モウセは唯神の旨を受けて、民に取り次ぐに過ぎざりき。

イスラエル民族は、埃及を逃れてより目的地なるカナンに達するに至るまで、四十年を費しぬ。彼等の旅行は、普通の旅行にあらず。妻子眷屬、牛羊家具を携へ、水草を逐ひて天幕を移し、一方には生活を營みながら、他方には到る處に彼等の侵入を妨害せんとする勁敵と戦ひつゝ、進まざるを得ざりしなり。四十年を経過せるは之が爲なりき。曠野の旅行四十年間には、死せる者、生れたる者、數知れず。而して我モウセは、此の間に於て不歸の人となりぬ。彼が遺したる事業は、ヨシユアに由りて繼承せられ、イスラエル民族は、千辛萬苦の後、ヨシユア統率の下に暮はしきカナンに入り、多年の宿望を遂げぬ。

カナンには先住の民族あり、イスラエル人は、之と戦ひ之に勝ちたれども、カナン人の文化の程度は、遊牧の民たるイスラエル人に勝ること數等なりければ、戦勝者でありながら、イスラエル人は、カナン人の感化

を受けざるを得ざりき。カナシ人の當時の宗教は、バアルてふ偶像を拜することなりしが、何時いつしかイスラエル人の宗教に感化を及ぼし、靈と眞とをもて拜するを特色とするエホバ教に供物を獻げて禮拜するの悪風生ぜり。尙ほバアル教の感化は、之に止まらず、思想の方面にも變化を來たし、イスラエルの神エホバは、國土の神となり、國民の守護神となれり。此の變化は、主として彼等の國土、茲に一定したるに因るならんも、亦バアル教の感化を見逃すべからず。

それよりエホバ神の守護に由り、附近の敵を逐ひ、領地を廣め、旭日冲天の勢ひにて國運伸張し、紀元前一千年頃にダビデに由りて強大なるイスラエル王國は建設せられぬ。ソロモン之に次ぎ、宏壯華麗なる神殿及び王宮を造營し、繁榮を隣國に誇りぬ。ソロモンの子レボアム失政の爲に十種族（以前より分れて十二種族となり居たりしなり）は分離し

て、北方イスラエル王國となり、僅に二種族残りて南方イスラエル王國なる猶太を作りぬ。政治上の分離は、宗教上に影響するまでに至らず、初めの程は等しくエホバを崇信せるが、久しからずして北方王國の宗教、危機に瀕し、國民の多數は、エホバ神を顧みずして、バアルを禮拜せんとするに至りぬ。時に紀元前八百五十年頃、豫言者エリヤ起ちて其の民を誠めて大聲疾呼すらく、「他の神、即ち隣人の神を拜すべからずと。他の神即ち隣人の神といふからには、他神を否認したるに非ず、唯、彼等イスラエル國民は、己が神を拜して他たし神に仕ふるなといふに止まる。此の如き信仰は、決して永續すべきものに非ず。我信する神は、萬國萬民萬代の神なるか、然らざれば神ならざるものか、決して此の外に出づべからざるなり。

（三）正義仁愛の神。「北方イスラエル王國の信仰正路を離るゝと共

に道德上の頹廢日に益甚しきを加ふるに至り、紀元前七百六十年頃、豫言者アモス及びホゼヤの二人、驟然として起ちて國民の罪を責めぬ。其の所説を約言すれば、「エホバは正義の神なれば、決して一國に私せざるなり。正義を棄て、公道を去り、不信仰にして、悔い改むることなくむば、神は必ずイスラエルを亡ぼし給ふべし」といふにありき。茲に至りて先覺者たる豫言者に由りて啓示されたる神は、一國一民族の神にあらず、正義の神なりき。特にホゼヤが感得したるは至仁至愛の神なりき。彼の信仰に従へば、神はイスラエルの王たるに止まらず、慈愛深き父にて在せり。イスラエルの幼かりし時、我（即ち神）之を愛しぬ。我れ我子（即ちイスラエル）を埃及より呼び出したり。我れエフライムに歩むことを教へ、彼等を我が腕に乗せて抱けり。（ホゼヤ書十一章一）とある如く、エホバはイスラエル國民の父なりき。悖り従はざる民に對する神の心を、ホゼヤは

不貞不義の行爲をもて、夫の腸を寸断せる妻を慕ふ己が心に比べて、一層切實に感じたりき。斯くて正義仁愛の神は、豫言者等に由りて啓示されたり。さばれ、正義の言は兎角聽衆に好まれざるもの、罪に醉へる北方王國の民は、馬耳東風と聽き流しぬ。而して遂に豫言者の警告は實現せられ、後四十年にしてアツシリヤの爲に亡ぼされ、神の公明正大は證明せられぬ。

南方王國なる猶太は、辛くもアツシリヤの災厄を免れたるを以て、時の國王ヘゼキヤは、是れエホバ神の恩寵に由ると、大に喜び、豫言者イザヤの言を容れ、或は諸種の儀式を改め、或は地方の小神殿を毀ちて、中央に一大神殿を築くなど、宗教上の革新を企てたり。其の命令布告を集めたるものは、申命記として收めて舊約全書中にあり。時は紀元前六百二十一年、我國に於ては神武天皇の御代、イザヤに由りて啓示されたる神は

絶大無限なる権力の神にして、亦犠牲の神なりき。自ら我等の病患を受け、我等の痛みを負ふことに由り、豚の如き我等の罪をば雪の如く白く、潔め、虹の如く赤き罪をば羊毛の如く白く洒す所の愛神なりき。(イザヤ書一の十八)

後ユウフラテ河の沿岸に再興せるバビロニヤは、紀元前六百七年、さしも強大なりけるアツシリヤを亡ぼし、次いで破竹の勢ひをもてスリヤ諸國を席卷せしかば、南方イスラエル王國たる猶太も、其の爲に蹂躪せられ、遂に屬邦となりぬ。バビロニヤの政治は、寛大にして、猶太の舊慣を毀つに至らざりしかども、而かも猶太人等は、不平に堪へず、政府に對して甚だ不柔順なりき。時に起ちて彼等を慰諭教導し、頻りに柔順と忍耐とを説きたるを豫言者エレミヤとなす。されど頑強なる民等は、豫言者の教を容れず、益々反抗の精神を強めれば、遂に本國を逐はれて、バビ

ロニヤに移されたり。エホバ神の選民は、茲に至りて見る影もなき憫れなる様さまとなりぬ。而かも幸なる哉、困憊の極みに陥りて、豫言者イザヤを始め、ミカ、エレミヤなどが、相次いで百五十年間、教へたる効果は現はれぬ。北方イスラエルは、曾てアツシリヤに移さるゝや、繼て異教徒と化し、物質的にも亦精神的にも、全く亡びて物のあはれを留むるに過ぎざりしも、南方王國なる猶太人民は、俘虜の身となり、却つて信仰は高潮されぬ。彼等の神は遠くにあるも、亦近くにあるも、尙ほ彼等の神なりき。天地に充滿する靈なりき。(エレミヤ書二十三の二三、二四)而して神は單り猶太人の神にてあるべからず。若し單り猶太人の神にてありたらんには、猶太は他國の爲に壓迫せらるゝことあるまじければなり。然り、神は猶太人の神にして、亦バビロニヤ人の神なり。公明正大にして、至仁至愛なる神は、實に世界の神、宇宙の神なり。猶太人の宗教は痛ましき俘虜時代

に前古未曾有の發展をなせり。此の間に於ける教化指導の功を豫言者エゼキエルより奪ひ能はずと雖も、而かも彼等が前古に類ひ無かりし逆境に陥らざりせば、此の一大發見を見るべからざりしなり。不幸は悲しむべく、災禍は忌むべしと雖も、細心注意すれば、常に吾等の良教師たるを失はざるなり。

序に記す、正義仁愛の神は、最も高潮に達したる啓示なりしも、それが爲に他の低き方面は消滅せざるなり。尙ほ一面に民族的なる氏神の觀念は存続せり。今日明治の日本に於てすら、極めて原始的なる宗教が、尙なる宗教と共に混在する如かりしなり。

紀元前五百三十八年、東方に崛起せるペルシヤの爲にバビロニヤは敗られ、其の結果、猶太人は絶えて久しかりし故國に歸ることを許されたり。彼等は喜び勇み、歸來早々エルサレム神殿の修復に従事しぬ。後エ

ズラ及びネヘミヤなど、起ちて國民の信仰を鼓吹せるが、此の頃より律法儀式を過重するの弊漸くに現はれ初めたりき。後猶太の歴史は、政治的に幾度か變遷せり。即ち一たびはアレキサンダア大王の馬蹄にかけられて希臘に合せられ、一たびはシリヤの領國となり、一たびはマカベ家に由りて獨立王國となり、遂に羅馬の英雄ボムベイの爲に蹂躪せられて其の屬國となり、耶蘇時代に至れり。此の間に於ける猶太人の宗教如何と見るに、只管に儀式傳説の末に馳せて精神振はず、従つて道德地に落ちて偽善跋扈するてふ有様なりき。然れども尙ほ數に於て甚だ少く、固より世に現はるゝの著しからずと雖も、豫言者イザヤなどの高風を慕ひ、正義仁愛の神を信じ來れる者ありて、耶蘇に達するの橋梁となりしを疑ふべからず。パプテスマ・ヨハネの出現も亦、此の橋梁の一端を示せるのみ。

政治的に久しく獨立を失ひ、精神的に偽善、惡徳公行といふ有様なりしも、敬虔篤信なる人々は、深く神に信頼せり。彼等は「神は必ず我國を救ひ給ふべし」との信仰に生きたりき。實に彼等が信せしは希望の神なりき。現在の立場が益々暗くなるに従ひて、希望の光は鮮かになり勝りぬ。斯くて神は必ず我國を悲境より救ひ出す爲に、救主即ち基督を送るべし。との信仰は日増しに強くなりぬ。正しき人々にして神の國を待ち望める者、其處にも此處にも現はれぬ。此の高き信仰の中にも、尙ほ彼等の神は甚だ國民的臭味を脱せざる形跡あるを免れざりき。此の時なりき。耶蘇が世に出でたるは、

イスラエルの歴史は、實に無慙なる悲劇なりき。而かも其の靈的方面を見れば、神の啓示の發展史なりき。先づ一人の神、而して一家の神、而して

て一族の神、而して一國民の神、而して世界的正義仁愛の神、是れ各國民各個人の信仰的經驗を代表的に示せるものにあらずや。思へば趣味ある歴史なり。

## 二 耶蘇に於ける啓示

前述の如く、舊約全書は、神の啓示の發展史なれども、最初之を通讀する人にして、其の中に一貫せる琴線を見出し、そを辿りて發展の徑路を知らむは容易の業にあらず。舊約全書を通じて啓示の一貫せる發展を見出すの難きは、恰も將軍家、島津家、毛利家、其他名家の古記録、古文書や、近松、馬琴、西鶴等の戯作や、法律命令及び裁判記録やを雜然と綴り合せたるを讀みて、徳川三百年間に於ける思想の變遷を知り、其の中に一貫せる精神を發見するの困難なるに等し。然れども、茲に特別なる神の啓示は、唯一人格に由りて現はれたり。彼はイスラエルを始め、總ての啓

示の代表者にして亦目的なり。右曲左折せる山麓の小徑が悉く山頂に達する如く、イスマエル歴代の豫言者や、各國の聖者に由りて朦朧茫漠として示されたる神は、此の特別なる啓示に由りて、茲に始めて明かにせられ、小徑的啓示は山頂に達したり。此の卓越せる啓示を何とかなす、耶蘇基督の出現は即ちそれ。

(二) 史上の耶蘇。吾等が有する史料に據れば、耶蘇は紀元前五、六年頃、ユダヤ(當時猶太國はユダヤ、サマリヤ、ガリラヤに分れたりき)のベツレヘムに生れ、嬰兒にして難に遭ひ、父母に伴はれて埃及に逃れ、迫害者ヘロデ王死して後ガリラヤの僻邑ナザレに行き、其の地にて人と成れり。彼がナザレ人と呼ばれたるのみならず、時として基督教がナザレ宗といはれたるは茲に起因するなり。

序に記す。耶蘇の誕生を紀元前五、六年頃と推想したるは何故ぞとい

ふに、耶蘇誕生の後、恐らくは一年餘(二歳以下の小兒を悉く殺し、其中に嬰兒耶蘇を含むとヘロデ王が考へたるより打算して)にして埃及に逃れ、暫時にしてヘロデ王は頓死せるが、王の死去せしは紀元前四年の春なること、羅馬の古記録に由りて明かにせられたれば、耶蘇の誕生は、紀元前四年以後なるを得ず。四年に埃及滞在、旅行、ベツレヘム滞在等の日數を加へて、誕生日は的確に知らるべけれど、吾等の史料にては甚だ明瞭を缺くを遺憾とす。然れども、吾等は細中に蒔かれたる芥子種の如く、最初肉眼に觸れざる程のものが發達するに従ひて偉人の面目を發揮せるを見て寧ろ小とするものなり。

ナザレ邑は、山中の僻邑に過ぎざりしも、東方バビロン府より南方アレキサンドリヤ府に通ずる要路筋に當りたれば、自ら猶太風味を脱し、「異邦人の庭」と嘲けらるゝ程なりき。されど流石に猶太人は猶太人なり

き。子女の教育に律法、豫言書、さては古老の傳説、口碑を授くるを怠らざりき。耶蘇の幼年時代を委しく知るは難けれども、彼の教訓の中に、イザヤの豫言、詩篇及び律法の語句が善く消化せられ、彼の思想を發表する要具となりたるを見れば、母の膝下に遊びながら學びたりしならんと思はる。

ナザレの自然は如何と見るに、概して荒涼なる禿山多き猶太に在りて、ガリラヤ、就中ナザレ地方は、山水の景に富み、見渡す限り、野には百花咲き亂れて眼を喜ばしめ、森には群小鳥の耳を樂しましむるあり、畑には麥、葡萄、無花果、など、季に従ひて熟せるあり、美はしきナザレの自然は、深くも幼年なる耶蘇の心鏡に映りぬ。而して後年彼が教へたる深遠なる意義を含める幾多の比喻は、此の間に於て實驗せる事實なりしならむ。

耶蘇の父ヨセフは木匠なりき。耶蘇も其の職を學び、長じては父に代りて其の業に従事し(ヨセフは早く世を逝りしが如し)、弟妹等の成長を待ちて、日々の業に勵みつゝ、平和なる家庭の人として世を送りしならむ。此の間に於ける耶蘇は、善良なる普通人なりき。吾等は吾等の經驗を以て直ちに耶蘇を想像するを得るなり。

耶蘇の年凡そ三十歳に達せし頃は、弟妹も稍長じければ、一家の生活に關する顧慮は漸く減するに至れり。時にバプテスマ・ヨハネと呼ばるる者、突如としてヨルダン河邊の曠野に現はれたり。隱者的風丰の人目を引くさへあるに、搗て、加へて、彼が侃諤として説きたる説教は甚く時人の注意する所となりぬ。彼の説教を約言すれば、神の國は近づけり。悔い改めて審判日の準備せよ」といふに歸す。此の「神の國」はさまで深き意義のものにあらず。羅馬の羈絆を脱し、自由王國を再建せばや、と、ダビ



デヤソロモンの盛時を夢想せるに過ぎざりしなり。而して是れ實に當時に於ける時代思想を代表せるものなりき。是の故に、彼の周圍に集まりたる群衆は、何等の反對なく、唯々として其の命に従ひ、バプテスマを受けたり。而して我耶蘇も亦實に其の群中の一人なりき。

耶蘇は猶太人にして、猶太の空氣を呼吸せるものなれば、初より時代思想を超越せるかに想ふは曲事たるを免れじ。彼は一般愛國者と等しく、神の國を待望せるなり。ヨハネに従ひ、バプテスマを受けたればとて、兎角の議論を要せざるべきか。然るに、バプテスマを受けて水より上りたる耶蘇は、神の國の曙光を認めぬ。而して彼自身と神の國とは深き關係の結ばれあるを發見しぬ。自ら神の國の豫言者を以て居り、他に建設者の出づべきを待ちたるヨハネの慧眼は、直ちに木匠の子なる耶蘇を射たり。斯くてヨハネと耶蘇とは、肝膽相照らす間柄となれり。ヨハネ事

に坐して牢囚の身となるや、耶蘇は彼の後を受け、期は満ち、神の國は近づけり。爾等悔い改めて福音を信せよ。〔馬可傳一の十四〕と説き始めたり。言語の表面に現はるゝ所を以て見れば、耶蘇が述べしことは、公衆の期待せる所に外ならざりき。而かも日を経るに従ひ、耶蘇の特色は其の鋒を露はし始めぬ。彼が所謂神の國は、人々の待望せるが如き一時的のものならず、敵の爲に亡ぼさるべき類ひのものにも非ず。此處にあり、彼處にありと示さるゝほどに外部に現はるゝものに非ず。彼が所謂神の國は、蟲喰はず、盜賊侵さず、また錆び腐らざる、永遠不朽の靈的王国なりき。時人は耶蘇が自ら建設者として説く所の神の國は、彼等の所信と同じ名にして、而かも異義なるを覺ゆるや、少數昵近者の外は、殆ど總て失望せり。失望は怨恨となり、漸くにして反噬の牙を現はし、遂に捕へて十字架に懸けて慘殺するに至れり。耶蘇が公生涯に入りてより十字架上の

死に至るまで、僅に三年内外に過ぎざりしかど、言語と行爲と品性と相俟ちて神を啓示せること、古今東西に比ひなく、彼の人格に親炙せし者は、眞に父の生み給へる獨生兒びとの榮さかえにして、恩寵めぐみと眞理まことにて満てる〔約翰傳第一の十四〕を認めたりき。

(二)神は耶蘇の父。神を父と呼びたるは耶蘇に初まりたるにあらず、希臘の詩人もイスラエルの豫言者も、爾しかく稱へたること敢て珍らしといふ程にあらず。然れども、同一言語の表はせる意義に至りては、天地も帝ならざる差異ありと謂はざるべからず。即ち多くは父と呼ぶも、其の意義は、

イ、國民の父にして、君主帝王と稱すると異ならざるか。然らざれば、  
ロ、單に自然的關係あるのみにて、道義的關係を缺き、神は創造者にして、人類は其の受造者といふに過ぎず、敢て情愛の相通するあ

るを認めざるなり。

ハ、或は單に道義的關係あるのみにて、自然的關係を缺き、信仰によりて一時的親子の關係を生ずること、恰も養親養子のその如きものなりき。

耶蘇が神を父と呼ぶや、個人的親愛の情を以てせり。我を生めりてふ自然的關係に加ふるに、我を愛するてふ道義的關係を以て、彼は我父と稱へたり。崇敬、熱愛、柔順の心は、いみじくも「父の一語に表はされたり。福音書の記する所に依れば、彼十二歳にして此の大自覺の曙光を示しぬ。即ちエルサレム神殿を「我父の家」と呼び、子たる彼は、當然父の家に住むべきものなりと信じたりき。而してこは自覺の萌芽たるに過ぎざりき。爾來時代思想に由りて、或は養はれ或は毀たれなどせし中に、彼獨得の

自覺は發展し來りぬ。パプテスマ・ヨハネより洗禮を受けて水を出でたる時「我愛子」と呼べる神の聲を覺えたり。新時期は茲に劃せられぬ。曠野の誘惑の一面は、時代思想たる君王主義に對する慈父的信仰の勝利なりき。一般民衆が待望せる「神の國」は、依然として地上の國家なりしも、耶蘇が説く所は「父の家」なりき。然り、子として當然住むべき慈愛深き父の家庭なりき。彼が朝夕祈禱する様は、温き家庭に於ける父子の對話の如く樂しかりしなり。四面に楚歌を聽きながらも、十字架の上に苦しみながらも、彼は父の家に父と共に住みたりき。外部の壓迫や内部の憂悶や、甚大なりしと雖も、父の懷より子たる彼を離し得るものはあらざりき。彼と父とは一か將た二か見別け難きまでに密著せり。妨害の加はるあらんか、却つて密著の度を強うするのみなりき。

彼が常に自ら「神の子」と呼ばずして「人の子」といひたるは事實なれど

も、こは豫言者等が救世主たる特別人格を指して呼び慣れたる名稱を、其の儘使用せるのみにて、決して「神の子」の反對にはあらず。況んや神を呼んで我父といひ、孝情を以て接し、吾等人類に對しては只管父の慈愛を知らしむるを以て任とせしをや。

(三)神は亦吾等が父。耶蘇の信仰に従へば、靈界に於ける「父の家庭」は其の面影を自然世界に現はせり。見よ、野も山も總て父の慈愛を示せるにあらずや。空の鳥を見よ、蔭くこと無く、刈ることをせず、倉に蓄ふることなし。然るに爾等の天の父は、之を養ひ給へり。爾等之よりも大に優る者ならずや。爾等の中、誰か善く思ひ煩ひて、其の生命を寸陰も延べ得むや。又何故に衣のことを思ひ煩ふや。野の百合花は如何にして長つかを思へ。勞めず紡がざるなり。我爾等に告げむ、ソロモンの榮華の極みの時だにも、其の裝ひ此の花の一つに及かざりき。神は今日野にありて明

日爐に投げ入れらるゝ草をも斯く装はせ給へば、況して爾等をや。馬太傳六の二十六―慈愛限りなき父は、其の子等の善惡孝不孝に關せず、一人々々に愛し給ふ、即ち惡人の爲にも亦善人の爲にも、雨を降らせ日を照らするなり。馬太傳五の四十五、而かも善惡無差別には非ず、悖り從はざる不孝兒に對する父の愛は憂悶苦惱なり、不孝の爲に根本的父子の關係は截斷さるゝものならねど、愛情の交通茲に斷えて、道義的關係は消滅す否、全然消滅せるにあらねど、残るは痛ましき父の片思ひの愛のみなり。

悖り背ける人類に對する父の愛は、犠牲となりて現はる。耶蘇は身を以て父の犠牲的慈愛を示しぬ。即ち、悲しめる者を慰め、病めるを癒やし、貧しき者を靈に富ませ、世に棄てられて頼る邊なき者の力となり、暗黒に迷へる者に光明を與へ、重荷に得堪へで疲れたる者に休安を與へ、死

したる者に生命を與へ、死に至るまで愛の生涯をなせる耶蘇は、悉く其の愛を神に歸せり。何は兎もあれ、愛の人格として耶蘇を信せざる者は世にあるまじ。開闢以來、彼よりも汎く愛し、深く愛せる者ありや、而して彼よりも高く愛によりて繋かれる對手を引上ぐる者ありや、吾等の愛は深ければ則ち狭く、汎ければ則ち淺きが常なり。對手を感化し、其の向上に資する類ひのものに至りては、容易に見出し能はず。是れ一に聖からざるが爲なり。汎くして深く而して對手を益するものは聖愛のみ。

耶蘇の愛は、時間と空間の制限を超えたりき。固より常識を以て解し難きものあり。彼は人類相互間、特に一家庭の中に在りて、夫婦親子同胞間の愛情を解せり。而かも彼は父母に勝り、子女に勝り、兄弟に勝りて、吾等一人々々を愛するといふ。狂か痴か將た眞に然るか、何れにせよ、通常人を以て判すべからず。吾等は彼が人格の一端に接して、彼が言行の自